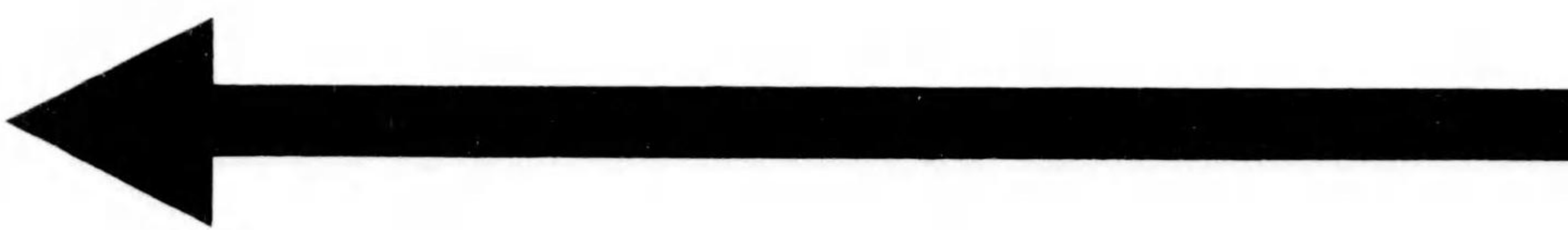


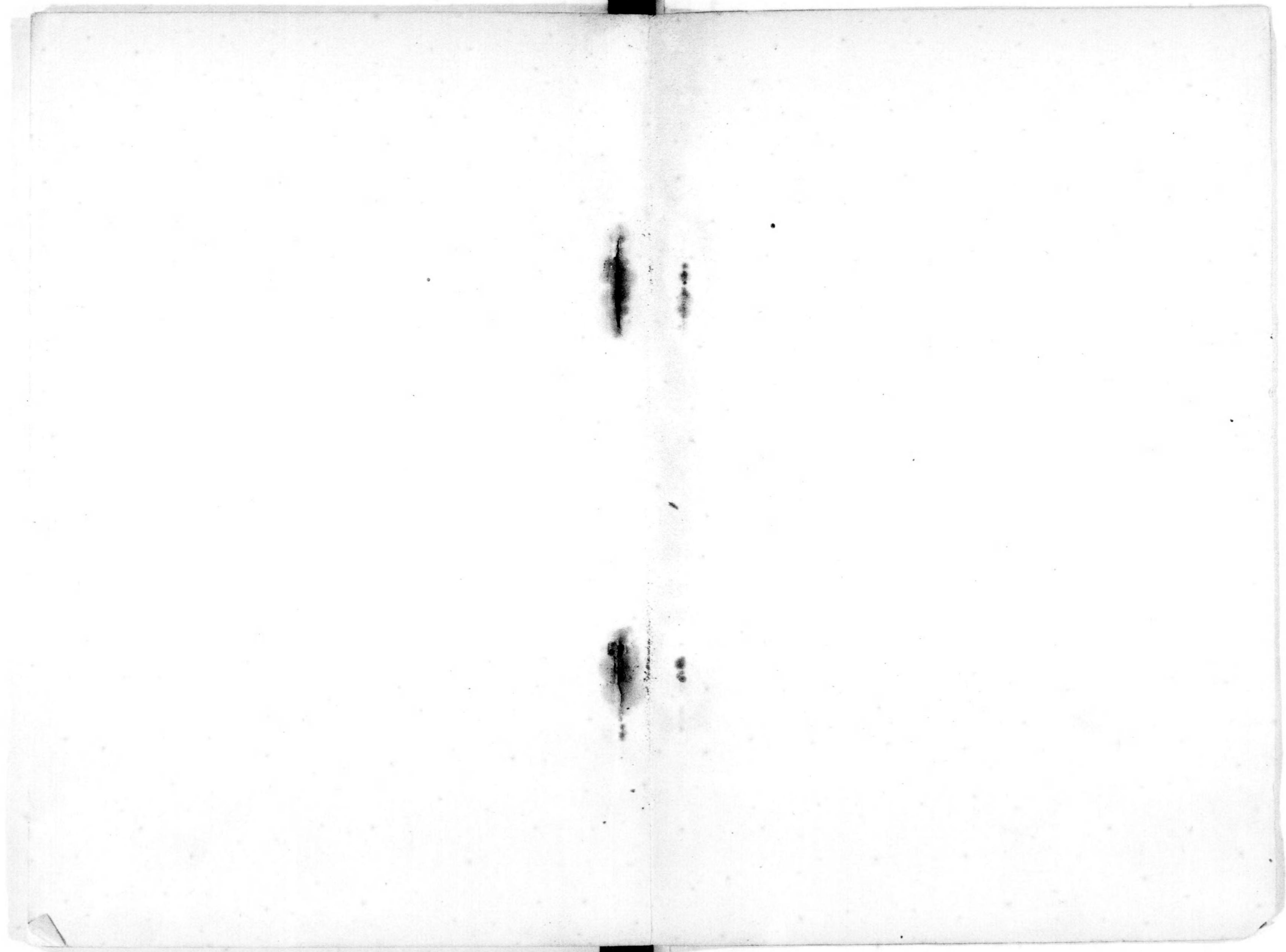
小説  
情



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





特102  
718

小説



雨月庵主人作





小説情

雨月庵主人著

病褥

【一】

「どう？今日の気分は？」

會社歸の洋袴の上の、縞シャツ一枚で、良人は病褥にある妻を見舞つた。

醫の診断によると、婦人病性の胃病であるといふ。いつもく夜半の、一

時前後から二時某と時を切つて、妻の下枝は激烈な痙攣を起して、神を呪ひ、

佛を語り、この苦痛があるならば、寧ろ鬮り殺に遇つたが增、一寸試五分試

に斬苛まれて、死んだ方が遙に樂いと叫ぶので。

かの癡學の發作の當時は、無論下枝も夢中に在つて、我を覺えない様ではあるが、傍から見ても、さも苦に堪へがたいかのやうに、常は花の如く美しい面に、しとんの油汗を流し、匂ある眉を打擗め、色ある口元を引歪めて、呼吸も忙しく、喚きに喚いて、五臟六腑も爲に、搔擗られてゐるのではなからうかと、思はれるほどに苦み悶へる。

その折の看護に立つのに、近い頃までは年若い婢も居たが、夜毎々々に度重なれば、厭はしく否にもなつて、親の病氣を申立に、逃げ歸つた後の、良人の規矩雄は當歳の兒を抱へながら、病妻に附添つて居る。

下枝も病體ながら、晝間の頃はさのみ苦艱にもならないので、兒は床の内へ寢かしながら、一通りの煮炊から時には洗濯をするのであるが、それも勞働の過ぎたと思ふ折には、その夜半の苦悶も烈しいやうであるのを、その以前、良人の家が繁昌であつた頃に引替へて、今は會社勤の月給暮に、考へ

るほどの、數奇も遠慮をせねばならず。それよりは自分の體を早く癒して、兒をも丈夫に育て、人一倍良人に事へたさの、心は矢猛ながら夜半の發作も續き越して茲に三月あまり、もしや何かの附き物でもあるのか、四方靜かに人も寢入つて十二時の時計を聞く時は、身内は氷を以て撫でられる心地、あゝ苦の時刻と知れば、その後は全く人事を覺えず。

かうして、かうして、假初に夏をも迎へ、近く秋にもならうといふに、今年は苦しみ通しに苦んで、懐しき良人にも、不自由な思をさせる事かと考へれば、忍ぶ事も出来ないほど悲しさの、

「貴方どうぞ、堪忍して下さいまし。」

規矩雄の膝に伏倒れる。不意の事に驚いた良人は、

「何、何、何——何が堪忍してだか、僕には分らない。」

「いゝえ……………」

と下枝はもう泣いて居るので。

「私が、こんな體になつて仕舞ひましたので、貴方へ御不自由をおさせ申すばかりか、飛んだ御苦勞をお懸り申します。本當に、どうしてまあ、私はこんなに足らないのでございませうか。どうまあ、臍甲斐ないのでございませうかと、思ひます度に、悲しくなつて、悲しくなつて、心も滅入るばかりになりました……。」

「いけない、いけない。」

と良人は制して、

「臍甲斐ないだの、足らないだのつて、僕の方で言ふのなら知らんこと、自分で、それにして仕舞ふ事はない。お前はまあ、今の處は病氣なので、そんなまた詰らん事を、くよくよく考へるのも、謂は、病氣の仕業なのだから何事も無念無想になつて、早く、病氣を癒す氣になつてくれないぢや、實際僕

が困つて仕舞ふ。」

「さあ、私も……。」

漸く面を仕上げ來たつて、

「早く、この體を癒したいは、山々なのでございますけれど。」

「山々なら、尙更、癒さうといふ一心になつてくれないぢや。」

「いくら、一心になりましたも、貴方。」

涙のある眼に規矩雄の顔を見詰めて、

「私は、此儘死ぬのかも知れませんが。」

さも思ひ入つて云ふのを、忽ちに打消す規矩雄。

「馬鹿な、馬鹿な！、そんな事があるものか！」

尙下枝は伏目になつたなりで、傍に寝入る嬰兒の、無心の手を握りながら、  
「この初ちゃんさへ居なければ、私なんて、死んで仕舞つた方が、可んで

すけれども……………」

【貳】

入梅の間の、打曇つて蒸して居たのが、終に雨になつて、庭に茂らうとする萩の上葉を打鳴らす。

良人は傍を向いて、見るとはなしに夕暮の、白い雨の脚を眺めながら、

「人間、死ぬの生きるのといふのは、終局の問題なんだ。まだ、癒る若い體を持つて居ながら、些ばかりの病氣と情死をしようなんぞと、考へるのは愚の行止だよ。」

わざと快澗を粧つて、高らかに——けれども淋しく笑ふ良人の、

「何しろ、病氣の事は苦にしないで、早く初坊を大きくするやうに、育てないではいけない。」

「それは、さうに違ないわね。」

妻は初て良人に同じて、不圖嬰兒を見るとばつちりと可愛い眼を明く。

「お、起しましたね。」

まづ初子に頬摺をすると、兒は何か厭はしいものが障つて、吃驚したかの如く火の付くやうに俄に泣立てる。

「おや、どうした？」

「まあ、どうして！」

夫婦は同時に叫んで、殊に下枝が兒を右の手に搔抱かうとする途端に、肩の所が電氣にでも觸れたかと思ふやうにひりつと痺れて、

「あ、痛！」

眉を顰めたなり、初子を床の上へ取落す。兒は彌々泣くの、

「どうしたつていふのさ、お前までが！」

と規矩雄は妻を窘めながら、兒を抱くと今度は何の事もなく、初子も其儘



泣止んで、笑顔まで作る。

「初坊め、僕の顔を見ると笑ふわ。」

「ちや、少し抱いて遣つて、下さい。私、火鉢の火を見たり、お茶を湧かして來ますから……。」

言つて、立上る時なほ、下枝は右の肩を左手に押へたなり、少し顔を皺めるのを、

「どうしたの？ 痛いのかい、肩が？」

椽へ一步踏み出した規矩雄は、振返つてさう言ふ。

「何——大した事はございませんの。」

良人には押隠すらしく、その痛む右の手を上げて、強ひて鬢の後れ毛を撫でながら茶の間の方へ。

「僕麻質斯でも、また起つたのぢやないか知らん？」

規矩雄はさう呟いたが、手にして居る初子が寢起もよく元氣なので、足柏子とりぐ、椽を東西に歩き廻る。

「よく、降る雨だね、初ちやん。お天氣だとお庭へ出て、今夜は丁度、お月さまも好い時分だから、涼みながら、お庭の景色も眺められるのに、雨ぢやねえ、雨こんくが、降つてばかり居るんぢやねえ、お庭へ出る事もならず、漸とこの、お椽側を歩いて居るばかり……。雨こんく〜てえもの、淋しくつて〜、つく〜否なものだねえ、初ちやん。」

例の東西を歩き廻つて居る後へ、すつくと立つたのは妻の下枝。不圖心付いて、愕然とする規矩雄。

「お、お前だつたのか。」

落着いて言つたのではあるが、その顔の色といふものはない。

「大層、貴方、吃驚なすつたやうだつてねえ。」

妻は病中の、稍高くなつた頬骨に、僅の笑の色を見れば、

「何、それほどでもなかつたのだが、お前が突然、顔を出すから。」

「でも、私、威かすつもりではなかつたのでございますよ。」  
と真面目になる。

「まあ、まあ、そんな事は何方でも可、早く燈火の付いた所へ行つて、一所に御膳を喰べやう、喰べやう。」

兒を抱いたなりに、規矩雄から進んで茶の間へ入る。

【※】

「初ちゃんは、私抱しませう。抱してお給仕しませう。」

飯櫃の傍へ座を占めて、下枝がさう言ふと、

「だつて、それも随分忙しないせ。第一、先刻肩が痺れたの、どうしたえ？」

「それはもう、癒りました——大丈夫！可ござんすから、初ちゃんを頂戴。」

「さうかい、可かい——ぢや、お給仕なしの御同前手盛にしやう。」

その事にして、規矩雄は兒を渡して、茶碗を取る時また、

「あ痛！」

と妻は叫ぶ。

「また、肩が痛んだのぢやないか。」

「え、でも少し……。」

顔を皺めながら、我慢をして居る。

「どうしたつていふんだらうね、其上儂麻質斯でも起られると困るが。」

妻は初子を抱いて、御飯にしやうとしたが、どうしてだか、無上に肩の番が痛むので、兎も角も、其所に在る座布団へ下すと、此方の痛は忘れるやうになる。

「下へ寝かして、蚊にでも刺されると可哀想だよ。ねえ初坊。」  
規矩雄は膳越に初子をあやす。

「附けました。御飯上れ。」

「さうか。飯喰つてから、お召替をするときませう。」

相對して夕飯を認めながら、見るとはなしに見る妻の顔の、あゝ！ 瘦せた事は。

結婚のその折は、我もその町内に名を得たる貿易商の嫡男と生ひ立ち、下枝も牛込に住む陸軍中佐の愛娘で、互の生家の繁昌より、楽しく美しい新家庭を作つたのであるが、規矩雄の父が株に大失敗の、此所に躓きが病の基に、歸らぬ旅に赴いてから、家藏も他人の物、規矩雄の身に付くものは、最愛の下枝あるばかりで、終に生れ立つた家を逐はれて、此家に詫住居。店に居たものゝ内で、僅に一人の同情者があつて、その紹介で丸の内の某生命保険

會社へ、勤める身とはなつて居るが、昔に變る家計の苦しさ、その姿を粧ふ暇もなく、搗てゝはこの春の頃からの病に襲れて、其色も紙の如く、嬌のあつた眼も窪みて常に涙を含み、濃い眉も産後の髪の毛と共に薄くなつて、頬の肉も落ちて痛々しう、あゝ、夜毎の病苦にかうまで衷へるものかと、規矩雄はつくづくと哀に思へば、胸も迫つて、夕飯の茶椀の數も少きを、

「どうかなすつて？ もうお茶ですか。」

と妻の怪しむも無理はなし。

不圖見返る病褥のあたり、たゞ暗く、臙なる庭の面。例の雨の脚ばかり白く見えるのに、

「雨は陰氣でいけない、座敷へは燈火を付けて、此所が片附いたら早く彼方へ行かう。」

規矩雄はやをら立つて、初子を搔抱き、直ぐに八疊の間へと出る。

洋燈も手づから點して、少しは明るくなつた座敷の様ながら、藻脱の殻の妻が病褥を見れば、今宵も夜半の苦みに、我も共々苦まねばならぬかと思へば、譬へ難なく否な心持になつて来る。

俄に、泣き立てる嬰兒の聲、規矩雄は我に返つて、

「さう。もう、乳を飲む時分なんだらう。自分達ばかり腹を拵へて、子供は放り出しか、可哀想にねえ。」  
と静に揺りく、

「もう、牛乳はないのかね。」

臺所の方では、洗ひ物の陶器の音がして、

「今、其方へ行きますから。」

兒は、いつもの空腹を催した聲よりは、むしろ悲痛の思でもあるか、調子も變つて泣くので、規矩雄は氣が氣でない。

「おい、其所をなるだけ都合して片附けて、早く飲まして遣つておくれ。」  
臺所へ行く隔の障子に立つて、その泣き聲の音ならぬのを言ふと、  
「はあ、さう、只今。どうもね、牛乳はどうしても飲まないで困りますの。」  
「飲まない？ 飲まないは困るね。お前の乳を飲ませるのは、醫者から禁じられて居るのではないか。」

下枝は泣く兒へ、捨臺詞の二言三言で慰めて、入れるものを入れ、片附けるものは片附けて、

「お醫者様はさう言つたつて、肝心な初ちゃんやんが、私の乳でないと飲まないのですもの、仕様がありません。」

言ひながら、自分の脊より僅高い所に釣つてある蠅帳の扉を明けて、上の棚へ残りの物を入れやうとする妻の手の、糸の如く、蒼く細き。

梁の上の、薄暗がりをけた、ましく鼠は暴れて行く。

「さあ、さあ、さあ、さあ、今母様は來ます。直ぐに來ます。直ぐに來て、初ちやんにお乳を上げるつてよ………。しかし。」  
と規矩雄は獨言になつて、

「困るなあ。牛乳を飲まないでは！腎臓炎こそ癒つても、下枝はあんな神經的な病氣になつて居る。あの病氣のある乳を、子供に飲まして可くない事は、醫者に聞かなくつても分つて居るのだのに、牛乳を飲まないで、母乳を慕ふやうちや誠に困る。」

あれ、また泣く、仕様がな！今、直ぐ、直ぐに母様は來ますから、お待ちなさい。

人間の乳がそれほど好なら、經濟が許すとすれば、適當な乳母を雇ふに手間は入らないのだけれども、今の境遇でそんな事は思ひも寄らない。

また、ひどく泣く。困つたなあ！悲惨な聲をして泣く。どうかしたのではないか。何所か痛むのではないか。あ、よし、よし、よし、今直ぐ、直ぐに母様が來ますよ。母様が來て、直ぐに——實際は、可くないか知れないけれども、急場の凌仕方がない。下枝の乳でも何でも飲ませなくては。」

呟いて居る所へ、濡れ手を白金巾の前垂に拭き、下枝は座敷へ來る。

「さあ、さあ、さあ、飲ませて上げませう。お待遠様でした。」

「ほうら、ほら、母様が來た、泣くんぢやない、泣くんぢやない。」

つと渡す兒を、受取るはずみに、下枝の右の肩は例の痛む。

「あつ！」

と叫びさうにして堪へて、左手に力を入れて漸と初子を受取つて、乳房を含ませると、初は嫌つて、その乳房をどうしても含まぬ。

「それ、それ、それ、初ちやん、おつばいですよ。さう泣つきしちや困る

わ。さあおつぱい——さあ。」  
無理に含ませれば、もがくとなほ泣いて、右に除け左に除けて、嫌ふ様なのを、

「どうしたい、飲まないぢやないか。」

「いつでも、初はかうなんですよ。」

「いつでもぢやない、今夜はどうかして居るのぢやないか、何所か痛いとか、何とかいふのだらう。」

「いゝえ、そんな事はありません。」

下枝の方は寧ろ平気で、根もよく、終に乳房を含ませ了れば、兒はそのまゝに泣き止んで、夢のやうに飲んで居る可愛の様。

「ね、飲み初めましたらう。」

良人の面を見上げて、淋しく笑ふ。

「さうだね。」

と規矩雄は頷いて、なほ兒の無心の姿に見惚れて居る。

「貴方、この間に、お召を着替へて入らしつちや、どう？ 私、お手傳が出來なくつて、濟みませんけれども。」

「何、手傳なんて、それは可よ。」

なほ一寸嬰兒の頬の色を窺つて、規矩雄は漸く茶の間へ着更に立つ。

外はもう、とつぷりと暮れて居るが、此間の燈火が映してか、庭の面はまだ明るく、一しきり小止になつた雨に、萩の枝も漸く起きやうとする氣色。

不意とその萩の葉の間を見ると、鳥か、蝙蝠か、黒いやうなものがちらりとする。黒いと思つたのは、寧ろ藍色である。その藍色の、眼とでもある所か、螢ほどの光があるのに、葉の間を縫つて、動く、光る。

「おや、何だらうかしら？」

下枝は獨り呟いたが、やがてまた更に、睡を定めて見入れば、もうそんなものもない。

「雨垂か、露か何かなのだらう。」

とそのまま、心にも懸けず、兒に飲ます乳房の加減をして居るところへ、細の細い飛白の單衣に着更へて、規矩雄は此間へ来る。

「少し、雨は止んで来たね。」

「外は、すつかり暮れました。」

「今夜も、また、どうく降られるのかと思つた。」

「雨は、私嫌。」

「誰だつて、恐らく好きなものはなからう。」

「でも、昔の歌なんぞちや、随分雨が好きな坊さんなんぞが、あつたやうぢやございせんか。」

「そりや、坊さんだから陰氣な雨が、好きなのだつたかも知れない。凡人は矢張、からつとした、好い天氣で、そよくと涼しい風が吹いて、夜ならば冴えた月に、露つぼい小川の畔を、散歩するなんといふのでなくつちや、心が行かないからな。」

「さう言へば、貴方とも、些も外へ散歩に出ませんわね。」

何故か、規矩雄は答へないので、直ぐに氣附いた下枝は、

「こんな、病氣になつちやつて、瘦せつけて仕舞つたら、もう、貴方も外へ連れてお出になるの、お好にはなりますまい……………」

と打沈む。規矩雄ははつとして、

「そんな、そんな、外へ連れて行くのが好かないなんて事はない。早く快くなつて、僕も相應に餘裕でも附くのなら、轉地療養でも何でも行かうぢやないか。」

下枝は一寸良人を見て、物を言ひ出しさうにしたが、言ひ出し得ないのでその話はそれ限になると、不圖乳房を含む初子の口元を見た規矩雄は、

「初坊、鼻血でも出したのぢやないか、眞赤だよ。」

洋燈を取つて兒の顔へ差し付ける。鼻血ではないが、初子の口の周圍は、どうやら赤味を指して居る。

「どうしたのでせう？」

妻も疑つて、何氣なしに兒の口から乳房を引出すと、がぶりとばかり吐き出すものあり。

「お、血ぢやないか！」

「初が、血を吐きました！」

言葉こそ變れ、夫婦は眼と眼を見合はすと同時に叫んだ。

初子は忽ち、ある魔にでも襲はれたやうに、ひつひと泣き立てる。

「あ！初はどうかしたのだ。」

「病氣になつたのぢやないか。」

二人の面には浮く憂の色。下枝は已の乳房を握るとはなしに、確と握れば、怪むべし！乳首から迸る唐紅。

「血だ！お前の乳は血になつて居る！」

「ぢや、初ちやんに、今まで、血を飲ませて居たのですか知ら！」

再び見合はす顔。再び驚の色全く白く、影も淡い籠洋燈に懸つて、灰色の大きな蛾が最期を遂げる。

酔客

【壹】

門の溝板を、かたこと、突當の方へ行つたかと思ふと、また歸つて來て、



表の方へ出た足音であるが、それが再び戻つて来て、我家よりは二軒ばかり前へ立止つた様子。

「何所かの家を、探して居る人らしい。」

規矩雄がさう言つた時は、下枝の乳首からもさも清く白い乳が、出るやうになつたので、初子も快く之を飲んで、母の膝に寝入つた所なのである。

「一寸、伺ひますが。」

と皺枯れた聲が、規矩雄の耳に入ると、忽ち何物かを思ひ出して、それは確に馴れた聲音である事を知つた。

「八杉さんのお宅は、此方ですか。」

しかし、誰とも判じは付かないけれども、我家の名を尋ねられて見れば、應じない譯にも行かず、

「はあ、八杉は手前ですが。誰方？」

上り端の葭戸の邊まで近づくと、

「お、規矩ちゃん、私——僕だよ。」

と工合の悪い格子を、力任せに開けて、つかくと入つて来たのは、夏外套と新ハナマの帽を、びしょく〜に雨に濡らした、眼の鋭い、髭のむしやく〜した三十格好の男の姿が、病褥から來る火影で、幽ながら見える。

「誰方でございましたつけ……………」

規矩雄が怪ぶむと、

「や、僕さ——河瀬石町に居る時分には、隣同士の仲好だつた、稻津由兵衛の次男息子さ。」

「あゝ！」

と規矩雄の驚くも無理はない。

稻津由兵衛の次男祐次は、その當時有名な放蕩者で、その兄嫡子某が病死

から、やがて繼續した三代目稻澤由兵衛の名も、身を持崩すと共に滅茶にして、規矩雄の家の倒れない三年も前に、まんまとその家を潰して仕舞つたほどの代物で。延いては規矩雄にとつての、大悪友の、一時彼をして下谷、霞町と遊ばせた、指南番はかくいふ稻津祐次であつた。

その指南番の祐次も、生家没落の後、稻由には本家なり故郷に當る、江州に身を蟄して居るといふ事は、それから風の便に聞く所であつたが、今日のあたりにその人を見やうとは——而かも、このひどい雨の晩に、わざわざ尋ねて來やうとは思ひも寄らず。けれどもこの珍客を迎へるのに就ては、懐し戀ひしといふ感よりは、何となしに忌まはしいやうな、不快な思が先に立つので、自然と愛想よい言葉も出ないやうになる。

「やあ、祐さんでしたか。」

とそれだけを言つた限。祐次は聞いて、夜目にも否な顔をして——その顔

は赤く、吐く息は酒の香に腐つて居るかと思ふばかり。

「祐さんさ。祐さんなればこそ、この降るのにわざと、昔馴染の規矩ちゃんを尋ねて來たのだ。上つて行け、一吹吸つて行け位のお世辭もあつて然るべきだらうと思ふが、どうだ。」

一本音が折れて、無格好になつて居る蝙蝠傘を杖に、上り端にぐらくして居る。

規矩雄は前と同じ調子で、

「お上り下すつても、宜しいんですけれども、生憎……。」

「我家には、病人があるものですから。」

「病人？ 誰？」

と血走つた眼を見張る。

「え、何、家内が些ばかり加減が悪くつて……………」

「家内？細君かい？お神様かい——お神様が病氣では御心配だらう。知らぬ中でもない、是非久し振で、細君に逢つて行かう。」

べら／＼の夏外套を脱ぐかと思つて、汚れた雑巾のやうに、上り端の臺へ丸めて捨て、煮しめたやうな淺黄縮の浴衣の、それまで雨の通つた裾のあたりを、一振振つてつか／＼と上りに懸る。

【貳】

「あ、待つて下さい。」

と制する規矩雄の手を振解いて、

「何故さ。止める！」

例の鋭い眼を剝いて、酒の息を眞向に嗅がせる。

「止める……………」といふ譯ぢやないんですけれども。」

「止めるのでなくばと」

言つて、葭戸の内へ入るなり、祐次は規矩雄の身を摺抜けて座敷の方へ。

兒を漸と寝かして、少し落着いた眼の前に立ちはだかる人のあるので、不

圖見上げた下枝の、

「やあ、細君——しばらく。」

へた／＼と其所へ横に倒れて、起き直つて四つ這になつて、それでも祐次

は禮をするつもり。

「誰方です？一寸。」

病婦は眉を擡めて良人に問ふ。酔つた人の後に立つ規矩雄は、

「やあ、お前とは全く時代が違ふ。丁度お前が我家へ来る、二年前までは

御懇意であつた、お隣のお家の息子様なんだよ。」

下枝がなほ解し兼ねて居る顔を、酔うた眼に見入つてゐた祐次は、

「おい、咲ちやん、咲松姐様！ 今更になつて、何だ白張つくれて！ 稻津の若旦那を見忘れたのか。」

ぐつとばかりに睨んだ。

●次が咲ちやんと呼び、咲松姐様と叫んだのは、無論人違である。下枝はその人違である事に就ては、むしろ可笑く考ふる所であるが、規矩雄が耳にこの『咲松』といふ名の響くと忽ち、氷の谷へ突落されたかと思ふほど、慄然とすると共に否な思がして、

「常談言つちや……常談言つちや困る！ 祐さん、これや私の家内でつひぞ貴方にお引合せした事はない女ですよ。」

齒の音の合はぬのを、強ひて／＼それまで言へば、祐次は高らかに笑つて、

「常談？ 常談は君が言つて居る。稻津祐次河瀬石町の家を潰して、久しく江州に垂れ籠めて居たからつて、さう三四年に毫碌はしない。而かも人も

あらうに、八杉の規矩ちやんに打込んで、打込んで、死ぬ生きるとまでなつたのを、僕が君に取持つて遣つた咲ちやんを見忘れはしない。

謂は、かう月下氷人のこの祐次を、二人の真中へ置いて、こんなに他人扱にされるのはつやく／＼合點が行かないね。どうしても合點が行きませんね……………」

初めは酔うた人の、何を言ふかぐらゐにしか思つて居なかつた下枝も、不圖聞耳を立てるのは良人の上に、我には語らぬ秘密のある事。

規矩雄は頻に遮つて、祐次に多くを言はせまじとするかの如く、

「まあ、まあ、今、そんな事を言はないだつて、可い事ですから……………まあ、こんな醜しい所ぢやありませんけれども、時にはゆつくり遊びに来て下さつて。」

「時には、ゆつくりだ？」

と言葉尻を取つて、

「時にはゆつくりだが、今夜は早く歸れか。え、おい、規矩さん。おい、飛んだ御挨拶ぢやないか。

なるほどなあ、見ればこんな可愛らしいのさへ、夫婦の中に出来てよ、なあ、いちや〜いちや〜、年が年中二人して居た日になれや、昔馴染も昔馴染、月下氷人とも出雲の神の身代とも言はうやうない、この稻津祐次を冷遇するのも無理もないさ。

おい、咲松さんも咲松さんぢやないか。丸で見も知らない、外國人のお座敷へでも出たやうに、おつう、つんと片附けて、大恩のあるこの稻津の若旦那を、仇を以て出て行けよがしにするのは、あんまりぢやないか。」  
彼は下枝を、下枝として決して見ぬのである。

【参】

聞くに彌、聞き兼ねて規矩雄が、

「稻津様、今夜は貴方も酔つて居らつしやるから、お人違なさるのも無理はありませんけれど、この家内は全く貴方の御存じのない、丁度貴方がお國へお歸りになつた二年後に、貰つた嫁なのですから、お引合せするのは今夜がはじめてなので、貴方もその覺召で居らしつて下さらないぢや困ります。」

言葉の終には、少しでも宥めるやうに、多くを言ふなの意味を含ませれば、初めて我に返つたやうな祐次は、酔も漸く醒めて來たかの如く、四方をさまよろ〜と見廻した末が、規矩雄の顔と下枝の面とを、比べては打案じ〜、

「さうかな……………? さうかな……………?」  
と小首を傾けつゝ、

「さうでなくば、咲松さんの妹か。」  
咲松の名に、規矩雄は再び身を顛はせるのである。

「どうも、よく似て居るから——ねえ、奥様、貴女の姉様は、もしや霞町で藝妓をなすつてゐた、檜の屋の……。」

「祐次さん！」

屹と呼んで、規矩雄が遮つて、

「もう、その話をなさるのなら、お歸り下さい！」

常の氣の弱いには似ず、さう言ひ切るので。

傍に不快の思をしてゐた下枝も、その尾に續いて、

「私も、御覽の通り、病氣の體でございますし、子供も伏せつて居ります。

また、失禮でございますけれども、貴方にお目に懸りますのは、今晚が初めてなのでございますから。もし、また規矩雄に御用がおありならば、晝間會社の方へでも、お越し遊ばした方が、こんな見苦しい所を、御覽遊ばさないで、總方宜しいかと存じますが。」

いかに無作法者も、懲りよとばかりに言ひまくれば、祐次は寧ろけろりとして、

「や、失禮しました、失禮しました。夜分出て、全く御迷惑には違ありません、それはお察し、て居ます。」

ひよこくと下枝へは禮をして居たが、後を獨言のやうに、

「しかし、不思議な事もあればあるものさな。この雨の降る中を、自分はどうして此所へ来たのか知れないのだ。

規矩雄さん、君が居る以上には、君の家に相違ないんだね。しかし、僕は今日、否先刻までは、全く君の事を忘れて居たのだ。忘れて居る位だから君のかういふ所に居るなんといふ事を、知る譯はないのだに、どうして僕は規矩雄様を、尋ね當てて来たのだか、一向分らない。」

つくづくと過ぎて来た事を考へる。規矩雄も下枝も、迷つて居る祐次の面

を見守つて、

「では、祐さんは知らずに、此裏へ入つて、お居でだつたのですか。」

「それでも、近所で、宅をお聞きになつて居らしつてたやうぢやございませんか。」

「いや、いや。」

と冠を打振り、

「そんな事、一向知りません。」

「八杉さんのお宅は、此方かとお聞きだつた位ですよ。」

と規矩雄の言葉を、

「さう言へば、夢のやうに、さう言ふやうな事を、聞いたやうにも覚えて居るが……………」

其間に不意と胸に浮かんだ事は、

「規矩さん、今それでは、咲松さんはどうして居るか、御存じ？」  
規矩雄は忽ち否な顔をして、妻の前でその話は止めよの意を含ませても、先は些でも曉らばこそ。

「僕は、去年の秋、實は國から出て来たのですが、一時、悪辯護士の家へごろ／＼居候して廻つて歩いた。その頃に、矢張ある辯護士の家の細君で當時よく、君と僕とで座敷へ呼んで遣つた藝妓があつた。小楸つていふ。彼がさう言へば咲松の噂をして居たわけよ……………」

その咲松の噂も出兼ねまじき氣色に、規矩雄は氣が氣でなく、

「あゝと、丁度雨も小止のやうですよ。何所に居らつしやるのか。電車通り位までは、送つて上げて……………ね、下枝さん、一寸留守番をして居てくれるでしょ。」

「えゝえ、行つて入らつしやいましたも。」

規矩雄は終に祐次を連れ出して、漸く霧雨になつた霽の町を行く。

「困りましたね。あゝ、素破抜いてくれちや。何ぼお酒が行つて居るつたつて、あゝ、手厳しく素破抜いてくれちや、實に困つた。我家の女房がまた常の健康な體なら兎も角、今言つたやうな、夜半は痛いので、碌々寝ないものだから疲が来る。それに産後から此方、どうもヒステリーが残つて居て、一時は氣違のやうになつた事もあるんですよ。」

だから、全くの所、些の事でも殆、病妻の耳には入れないやうにしてゐる位であるのに、ましてや昔の悪戯と水に流して、自分でさへ忘れて仕舞つた古疵を擔き出して、人もあらうに、氣の小さい、女房の前で打撒けるんですよ。あんまり友達甲斐がないと思つて、私は弱つて仕舞ひましたよ。」

「や、や、や。」

と例の、骨の折れてふわ〜と、無氣味に布の浮いて居る蝙蝠傘の下で、祐次は頻にお辭儀をしながら、

「あんまり前後無茶苦茶になつたもんだから、つひ——全く——咲松さんだと思つて、細君を呼んだ時には、酒の勢にするのも何だが、全く夢中だつたね。」

さういへば規矩さん、あの咲松といふ藝者は、君を思ひ死に、到頭死んで仕舞つたのださうだが、その事を君は知つて居ますか？」

河岸通りの人の往來も絶えて、軒の燈も班な雨の路を、歩いて行く襟元から、慄然とした規矩雄は、

「そんな、そんな事は聞かない！」

その聲は顫へて居る。

「君は、あの咲松が死んだ事を、聞かない？ 本當に聞かないのですか？」



覗き込んで、うるさく聞くのに、自と面も外向けられて、

「些も聞いた事はありません……………」

「さう……………。そんなら、僕はその時の様子を、例の辯護士の細君に聞いたのだけれども——その時の様子を、手に取る様に聞いたよ、あゝ。すっかり聞いて居るから、凄じいだらう。歩き話ながら、規矩さんが知らないといふものなら、悉しく——僕が聞いたわけの事は、お話しても可のだが……………」

「あゝ、稻津さん。」

と矢庭に呼べば、

「え？」

「あんまり遠くまで行くと、我家で案じるから、此邊で失禮します。」

「おつと、おつと。」

となほ祐次が、袂を取らうとするのを振放した。

「全く、私は此所で失禮する！」

そのまゝ不意と元來た道を引返す規矩雄。

見返る祐次は嘲笑つて、

「女房孝行め、友達を捨て、歸りやがった。もう少し一所に行けば可に、

咲松が恨み死の摸様をすつかり、落なく話して、喫驚させて遣らうと思つたに！

此方には規矩雄が胸に、咲松が恨み死の摸様を悉しく知るや、知らずや、踏む足も宙を飛ぶやうに歸り着く、我家へ入る長家の木戸の潜り戸を明けやうとするに、内より閉されてか、一度は明かなかつたが、漸との思ひにこち明けて潜り入らうとする目の前に、何やらふわりと白きもの！

愕然と見詰めれば、浮かぶが如く沈むが如く、雨の色を見せてきながら我

を誘ふかのやうに、五軒目の我家の門、とある所まで来れば、風か、鼠か、けたましき響して、それと共に白い物はぱつたりと消える。内では、物に襲はれたらしく、絶え入るばかりに泣く初子の聲。

遺物

【壹】

「今日は幾日？ 姐様——あゝ、十三日ね、ぢや、月が變つても咲松姐様の日ぢやなくつて？」

抱へ藝者の小松が言ふと、大姐様の松吉は魚河岸の浴衣に、三角形の椽端近く、昨日の朝買つて来た入谷の朝顔の花の色を眺め、揚枝を遣つて居て、

「あゝ、さうだよ。」

「それに、今日は巳の日だわね。ぢや、また咲松姐様の歳と同じ日よ。御佛壇へお線香を上げて置きませう。」

やをら立つて佛壇へ近づいて、これや亡き咲松への回向のしるし、御燈火も上げて、お線香も上げて、鈴を鳴らしながら、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

「さういへば、福ちゃんも藤間の歸に、姐様の好だつた、お團子を買つて来て貰へば可かつたつねえ。」

獨言のやうに言へば、大姐様も、

「私も、さう思はないぢやなかつたけれども、福助は朝行つたつて出来てやしないから、お晝から別に女中にでも、買ひに遣らうと思ひ返したのさ。」

さう言つて立上つて、臺所へ行く。

小松はまだ佛壇の前に居たが、一年前にこの家の二階で死んだ咲松姐様の

優しい人で、よく自分が大姉様に小言を言はれたり、時には烟管の筈のあつた時、よく／＼取なしてくれた——良い人であつたのも、病氣には勝てず。その病氣も誰ゆるゑの？皆憎らしい、人情知らずの八杉の若旦那の爲、一月と十二日といふもの、全く喰べるものも喰べないで、好きなものを勧めても、いゝえ私は、いつまでも／＼死ぬまでは、米一粒とても口にはしない。餓ゑて渴ゑて、終に倒れて仕舞へば、體は灰となつても、魂は滅びないで、恨めしい人には訖度仇をすと言ひ切つた。その凄かつた顔の色、今に忘れず、目の先にもちらつけば慄然として、佛壇から身を退る時、つひ足元に三寸か、四寸とはない、糸屑のやうな細いものがある。

「何だらう？」

と小腰を屈めて何の氣なしに摘まうとすれば、その黒い糸屑は、くる／＼と巻くかと思つて、また延びて、小松の指先にはかゝらず、つか／＼と戸棚

の開き戸の内に入つて仕舞ふ。

「あ！ 咲松姐様の魂だ！」

と叫んで、その事を臺所に顔を洗ふ、松吉に告げると、

「馬鹿な事お言ひでないよ。一年も経つて、咲ちやんの魂がうろついて居る奴があるものかね。」

「だつて、姐様は己の歳よ。何でも蛇になつて、我家へ來たのに違ないわ。」

大姉様は笑つて、

「蛇になつてだえ？」

「え、今御佛壇の下に蛇が居ましたわ。」

「何てえ、まあ蒼い顔をして居るんだい！この電車はぐる／＼の、青いものつてえは、往來の樹木よりない、ごみ／＼した所に、蛇なんぞ出て堪り事があるものかね。」

「だつて、魂となりや、姐様、何所へでも飛んで行きますわ。」

「おつほつほつほ、蛇に翼は生へて居やしまいし。」

と松吉は笑つて寄せ附けぬ。

遅い、朝飯の膳の間も小松は頻に咲松の話をして、

「さう言へば、今八杉の若旦那、何所へ行つて入つしやるでせうね。」

「八杉さんの番なんか、して居やしないから、私知らないやね。」

姐様は例のそつけない。

【貳】

小松は他事と思はない様に、

「まあねえ、姐様はあんなにも、若旦那を思つて居たのにねえ。何ぼ何だ

つて、若旦那は不人情だわ……………」

不意と自分の身に引比べるやうに、

「藝者つて、つまらないものね。人も自分も浮氣稼業と思つて居るから、この人をと眞實心底から慕つて居ても、向ふ様ぢや、玉子の四角と同じやうに思ひも寄らないで、直ぐに寢返を打つて、當時流行のハイカラ娘なんぞと手に手を取つて新婚旅行なんぞをする。振捨てられたもの泣かせだから、咲松姐様のやうな實のある人は、直ぐに恨み死に死んで仕舞ふんだわ。私なんて、もし、さういふ——眞實に思ふ人が出来たら、惚れて惚れ抜いて見せるわ。」

「それも可いだらう。」

と取合はぬ松吉は、もう茶にして居る。

「只今……………」

と門に聲。

「おや、福ちゃんお歸か。」

これはつひ、近い頃抱へた福松といふお酌で。浴衣懸に稽古歸の、障子を明けて入つて来るなり、もう一度姐様へお辭義をして、背後に挿した舞扇の包を出してもじくする。

「何だい、扇をおつに捻くつて、骨でも折つたのかい。」  
松吉はさう云ふ。

「いゝえ、さうぢやないんですけれどもね。」

と包んだ手拭を、解きかけて、

「路で、何所の何だか知らない藝者衆に遇つたんですの。」

「この土地のぢやないの？」

と小松が聞く。

「え。葭町の方ぢやないの。——久松橋の處ですの。病氣なんでせう。かうすつかり瘦せて仕舞つて、それでも髪ばかりは奇麗な潰しに結つて——眼

の美しい人でした。」

「眼の美しい女？」

と大姐様は考へる。

「で、どうしたい？」

「さうしてね。かう私と河岸通で行違ひしましたが、不意と振返つて、一寸一寸呼ぶから、

『私の事ですか？』つて聞くと、

『お前さん、檜の屋のお酌さんでしょ。』

『えゝ。さうです』つていふと、姐様の事や、それから小松姐様の事を聞くの。それはく我家の事を、よく知つてる人で、矢張女中には、お爲どんといふのが居るんでせうつてまでいふの。

で、私の事を可愛いお酌さんだつていつて、熟と顔を見ましたが、

『あの、これは否なんですけれどもねえ、お前さんも、見た所ちや十五にもなつてお居でだし、もう直、結綿にでも結ふ頃でせうから、その時、挿すやうに、私、この簪を上げませう。持つて行つて頂戴な。』

私が、まだ難有うとも、何とも言はない内に、その藝者は二歩か三步、向ふの方へ行つて、而して、その簪を私の手に渡したやうな覺もないのに、不意と明けて見ると、この扇と一所に包んである。

「おや！と思つて、其方の方を向いた時は、もうその藝者は居ないの。」

姐様、その簪つていふのは、これなんですけれども、何だか、氣味が悪いわねえ。」

福松が物語りく、出しかけるのを、

「お見せ。」

大姉様は遙に手を出す。小松が取次をしやうと、手にして見ると、古風で

はあるが、萩の花を透し彫にした平打の簪なので。

【参】

「あら、一寸姐様！こりや咲松姐様の不斷好で挿して居たのぢやなくつて！」

小松は直ぐに松吉の目の前へ出す。姐様は向ふの手にある儘で見で、

「なるほど、さうだよ。咲ちやんが好で挿してた平打に違ない。それに、あのお葬式を済まして、三十五日前にあの妓のもの、形見分をした事があつたつけ。あの時、誰かの口から出て——咲ちやんは、かうくいふ透し彫の簪を持つてたつけが、それが見えないつてつたぢやないか。」

「えい、さう、く。」

と小松は頷く。

「覺えてるだらう。つまりこの平打は。」

といつの間にか姐様の手にある。

「あの妓が、大切にしておつて、而して仕舞ひ失したのぢやなからうかつてつて、それつきりになつて居たのさ。それがまあ、見も知らない藝者が、外で福松に渡したなんて、不思議な事もあるぢやないかね。」

小松は黙つて考へて居る。

「もしや、前方咲ちやんが、その藝者に遣つてあつたものぢやなかつたか知らん？」

それに答へず、

「福ちやん。」

と小松がお酌の方へ。

「お前さん、今の話ぢや、眼の好い藝者衆だつて、左の眉毛の角の所に、針で押したほどの黒痣がありやしなかつたかえ。」

「そんな事なんか、一寸見て分るもんかねえ。」

松吉は打消したが、

「小松姐様、あつてよ。確にあつてよ。小さな、可愛らしい黒痣だけども、私その黒痣ばかりは、忘られないのよ。」

「姐様！」

と仰山に呼ぶ小松。

「何だよ。」

「姐様、咲松姐様が來たのですよ。」

とぐい／＼袖を引く。

「え！」

と少し氣味悪くなつたが、

「また始まつた、魂の一件かえ？」

後を笑へば、小松の方は真顔で、

「福ちゃんに、その逢つた藝者衆は、我家の事を、いろいろ聞いたつて？」

「え、よくまた我家の事を知つてゐるんですの。」

「お前さん、この簪をくれた時、難有うつてお禮を言つて？」

「い、え。今もお話してた通なの。お禮を言はうにも言はないにも、初か

ら向ふで、私に手渡しをしたのぢやないの、彼方でその簪を出して、私に見

せてる間に、不意と失つて仕舞つたかと思つたら、いつかこの扇と一所に包

んであつたんですのよ。」

小松と松吉とは、不圖顔を見合はした。その眼の色よりも、松吉の面の色

はなく、さも慄然としたかの如く身内を顫はして、今度は言句を次がす。

「姐様。」

「……………」

「……………なんぢやなくつて？」

「……………」

「だから、私先刻も言つた通、今日は巳の日でもあるし、咲松姐様の——

月こそ變つても、日は日ですつて、さう言つたのよ。矢張……………つても

はあるもんぢやありませんかねえ。」

松吉はなほなるべく平氣を粧つて、さりとして返事もなく、膳の上の簪を見

詰めて居る。

「福ちゃん。」

と小松が右の平打を其妓に渡して、

「お前様は知らないけれども、この簪は去年まで我家に居る、咲松姐様で

え人が持つて居たのだよ。お前様におくれたつたのは、同じこの家に抱へら

れて居るつていふ縁からなんだらうけれども、その咲松姐様の、まあ謂つて



見りや、遺物なんだから、大切にして仕舞つて置くだよ、可かい。」

「え。」

福松は何も、知らないから、その儘矢張舞扇と一所に手拭の中に包む。

「福ちゃん、そのお禮の爲に、御佛壇へ行つてお線香を澤山上げてお出でよ。」

さういふ小松の顔をちつと見詰めて、

「ぢや、姐様、咲松さんてえ方は、もう死んで仕舞つた藝者衆なの………」

「……………」

言ふ言葉も半の頃、水口で女中がけた、ましき叫び聲。

「どうしたつてんだよ。」

松吉が此方から叱ると、

「お、恐かつた！ 天井から何か蟲でも落ちて來たのかと思つたら、引窓

の紐でした。」

と女中は目の覺めたやうに言つて居る。

邪 推

【一】

「私、何も貴方が、お隠しになる事まで、お聞き申したいと、いふのぢやございませんけれども。」

と妻は憂鬱の調子で、良人に云ふ。

「此間の晩、あの何とかいふ酔つ拂が來て、言つた事がどうも氣に懸つてなりません。ねえ貴方、あれは一體何の事なんですか、もし貴方のお口からお打明けになつて、お宜しい事なら、仰つて下さいませねえ。」

規矩雄は今から會社への出懸の、身拵もして、いざといふ所で下枝から話

しかけられたのである。

「や、や、や。」

と實は困つて、

「隠すなんて、私や、お前には何を一つ隠した事はない。」

「さうでございませうけれども、この間の晩の事は……。」

「いや、彼はまた、あの酔つたくれの稲津の息子が根も葉もない事を言つたんだよ。別に私も氣に止めて居ないから、お前も夢と忘れて仕舞つて、可い事なんだよ……。」とれ。今日は出が遅くなつた。出かけやう。」

やをら——切抜けて立上らうとするのを、

「あ、一寸、貴方。」

「何さ。」

と少しうるさげに。

「會社へ入らしつやるのは、少し位遅くなつても宜しうございますよ。」  
「遅くなつて、少しも宜しい事はない。」  
「でも……それぢや、私が病氣で、死んで仕舞つても、貴方は會社へお勤めになりますか。」

病に窪んだ眼を、異様に輝かせて挑むやうに言ふ下枝。

「そ、そ、そんな事を言つてくれぢや困る。何も、生死の問題をこの出がけに決するんぢやない。」

「いゝえ、いゝえ。」

と妻は冠を振つて、

「貴方が、この儘會社へ入らしつて仕舞つたら、私は屹度死で見せます！」  
身を顫はしてさう言ふ。

「何を、何を！下らない事を。」

笑に紛らさうとしたもの、規矩雄の心の内は切ないので。

結婚のその當時、打明けて仕舞へば可かつたものを、何かの機会に〜と思つて居る内その折を失つて二年越、かうなつては今更に、謂はゞ舊惡を言ひ出さうでもなく、咲松との馴染の一條も、下枝が知らなければ、知らないで過ごしてくれた方が可いので、終に前々の夜まで、その耳には、咲松のさの字も入れなかつたのが、不圖した事から、かういふ破目になつて、我が秘密を打明けねば、會社へは出られず。會社へ出れば死んで見せるといふ。

例のヒステリー症が、また再發したのか。もう、夜半の介抱で、愛妻の事ながら、實は中々倦んで居るのに、かう責められては時に厭はしいやうな感の、起らないでもないけれども、強ひて堪へて、これも病氣のさせる業、下枝に罪はないものと思ひ返して、新婚の折と同じやうに、優しい顔で迎へて居るやうなもの、今朝のこの事と詰まつては、實の所規矩雄も窮して居

るので。

「そんな、下らない事を、言ふのだけお止しよ。」  
まづ優しく言ひ含めて、出勤をしやうとする。

【貳】

初の内は、下枝も、随分良人の言葉を、大人しく聽いて居る風情ではあるが、矢庭に遮つて、

「貴方、いくら私を欺さうと思ひなすつても、此間の晩の事で、貴方のお心はちやんと曉つて仕舞ひましたわ。

今日までも、昨日までも、婚姻の當時から私を、欺しに欺し抜いて仕舞つて會社へ毎日入らつしやるといふのは、私への言ひ拔で、實際はその咲松とかいふ、藝者の所へ入らつしやる。  
えゝ！隠したつて知つて居ます。

現に貴方、昨夜なんかは、我家の格子の外の所まで、その藝者が呼び出しに來たぢやございませんか。」

あれ！嘘なもんでございますか。夢？誰が夢を見まして？——あら！私が夢を見て？ぢや、あの酔つぱらひが、我家へ來たのまで、貴方は夢にしてお仕舞ひなさるの？

え、どうせ私は病氣。けれどもそれは、胃が悪いので、夜半になると眩度痛みます、死ぬかと思ふほど——死んだ方が、可いと思ふほど痛みますけれども、私は精神に別に狂つて居る所はないつもり。

貴方は、それを直にヒステリーだと仰る。ヒステリーなんて忌まはしい！私や、そんな忌まはしい病氣になる位なら、一思に殺されて死んで仕舞つた方が可わ。

私や、決してそんな病氣ぢやありません！斷言しても可うございます。

ですから、そんな、貴方が仰るやうな、始終夢を見ては、それを事實にして狂はしい眞似をする、ありふれた病的な女と私とを、一所になさいますけれども、私は同一視される事は嫌でございます。瘦せても枯れても國家の干城ともある、陸軍中佐大仁猛彦の娘でございます。軍人の娘が何で人に笑はれ嘲けられるやうな病氣になりませう！

病氣でないからこそ、此間の晩の事を知つて居ます。此間の夜の事ばかりではない、昨夜の事もちやんと知つて居ます。

その藝者が門口まで來て、駒下駄の音をさせたら、貴方はついとお立ちなすつた。え、知つて居りますわ。

私や、もう門口を、その前に貴方がお締めなすつたとばかり思つて居たのですが、實は締めたと見せて置いて、かねて約束をしてあつたものと見えて、門口の内と外で、貴方と向の女とは立話です。

また！夢と仰るの！嘘と仰るの！まあ！何所まで私を欺さうと遊ばすのでございませうか。

咲松！それはあの酔っぱらひの人の言つた通、全く藝者でございませう。それやもう私のやうな、無骨な軍人の娘で、學校生活をした、無粹極まるものなんぞと違つて、藝者は粹とか何とかいふので、またそれ相應の趣味のあるものでせう。美しい、可愛らしいものでございませうから、それやもう、私に隠して、貴方が——門口まで呼び寄せになつてお楽しみになるのは、無理もない事でございませうけれども、一言ぐらゐ私に、かういふ事が實際はある。これ／＼の秘密があるのだからと仰れば、私だつても、左様でございませうかと申して、別にそれに就て、嫉妬なんぞを起さうとは思ひませんでございませう。ならう事なら、こんな不束な者ですから、さういふ世事に長けた藝者と交際をして、せめては自分の愚なのを矯正して行つたなら、貴方に嫌はれる

やうな事はあるまいかとも、思ふ位でございませう。

ねえ、貴方、秘密をどうぞ打明けて下さいませ。——お打明け遊ばさないでも、實はちやんと知つて居る事ではございませうけれども、貴方のお口から、これ／＼といふ事を、お打明け下さらないぢや、何とはなしに心地の悪いやうでございませうから、貴方、どうぞねえ、この事だけで可ございませう。どうぞお打明け下さいませね。

そんな事を、私なんぞが申さないでも、よく御存知なのは——夫婦の間に隠し事があると、却て不和の基といふ事。

私は、貴方に仇し心がありであらうとあるまいと、妻としての義務は盡すつもり。よしんば貴方に、妻として私を愛して下さる思召があつてもなくつても、私は良人として、親しく貴方へ事へて居るつもり。仇し心の貴方でも、私の誠が通じれば、屹度感化させて見せるとまで、思つて居るのでござ

いますから、何も、今更になつて、強ひて押し隠すやうな事をなさらないで男らしく仰つて下すつても、可いではございませんかねえ……。」

【参】

酔客の稻津祐次の来たのは、無論事實ではあるけれども、元より此世にな  
いものが、門まで来たといふ事の、ありやう筈がないのに、自分がその咲松  
に逢つて、話までしたのを聞いたといふのは、夢！夢でなければ病的の妄想  
を、正に現と思ひ込んで、このやうに言ひ募るのは分つて居るが、かうま  
で病勢の高まつた時は、頭ごなしに押し付けて仕舞ふ事の、彌々反抗する種  
にもなつて。殊には是まで、下枝の耳に入れた事もない、自分が昔の藝者狂  
を初めて聞かした爲め、不思議に嫉妬の念の燃え出たものらしく、その焰も  
急に押へて、打消さん事もどうやら危険と思ふので、此上はいかにもして、  
徐に下枝の心を落付けるやうに、試るこそ、他に上越す方便もないと考へれ

ば、

「あ、可しく。秘密も胸にある事なら、随分打明けても見やうし、また會社へ行く事も、都合によつては一日やそこいら、休んだ所で、大した落  
度もあるまいと思ふから、まあ、下枝さんの氣の安まるやうに、ゆるりと此  
所で、話をしやうぢやないか。」

規矩雄は物柔かにさう言ふのを、下枝は例の冠を無上に振つて、

「否、否、氣安めなんて、否、氣安めにする話なんて、碌なもんぢやあり  
ませんから、そんな事なら私から御免蒙ります。そんな輕薄な、お話を聞く  
位なら、私や獨で居た方が、どんなに心持が好いか知れませんが、さつさ  
と會社へでも、藝者屋へでも行つてお仕舞ひなさいまし。」

「下枝さん！」

ときつぱり呼ぶ規矩雄。

「え。」

つと見上ぐる下枝の眼に、かの病的の光はなほ消えない。

「藝者々々つていふけれども、私は、實際そんなものは知らないんだよ。」

聞くと忽ち下枝はせゝら笑つて、

「そんなものがあるかないか、昨夜の事實が示して居るぢやございませんか。」

か。

「昨夜の事實？ その事實が既に間違つて居る。また夢だといふと、怒る

かも知れないが、それは確に思ひ誤だよ。」

「また！」

屹となつて、

「可くつてよ、もう！ そんな言ひ譯なら聞かない！ 早く會社へでも行つて

入つしやい！」

會社へは行かない。」

命する如く嚴である、規矩雄も沈思の末形を更めて、

「いや、さうまでに思ふなら、私だつても、お前の心が安まらなくつては、

會社へは行かない。」

言ひ切る胸の内には、機先を制せられた傾はあるが、かの過去の秘密を打

明けずに置いては、また今のやうな怪しき思ひ誤をされる事の忌々しさに、

それと漸く臍を固めた規矩雄の、

「や、下枝さんの言ふのは、あんまり疑ひ過ぎる。」

それも尤も、今までの二年越、お前に話して置かなかつた、罪は自分にあ

るのだけれども、その事實も全く過去の事なのだよ。」

ま、ま、さう打消さずに聞いておくれよの冒頭に、かの前々の夜尋ねて來

た稻津祐次に誘はれて、下谷霞町と遊び廻つた果が、咲松に馴染めた事の顛

末を語つて、

「それも元より、一時の、所謂逆上せといふのに相違ないので、下枝さんといふものが、公然と出来て見れば、自然に仇な移り氣は起らないもので、打絶えるとはなく其方へは、無沙汰になつて仕舞つたらば、その後聞くと咲松は、風邪とかい固で死んで仕舞つたといふ話さ。

あゝ、死んで仕舞へば、もうそれで厄介遁、身に添ふ罪もやがては消える事であらうから、いつそお前に過去の事を、話して氣を悪くさせるでもない、その儘に過ぎしたのが、今日となつては、自分の過失なのさ。

繰返して言ふが、咲松といふ其藝者は、死んで仕舞つて、今は全く昔の仇夢となつて居る。その事は確、祐次があゝの晩言つたやうに思つてゐるが、お前は聞かなかつたか。決して、下枝さんを欺さうなんぞといふ、悪意のある譯でも何でもない。その證據を見たいとならば、病氣が快くなり次第、咲松の埋まつて居る墓までも見せて上げるから。

なるほど、今まで打明けなかつたのは、私が悪かつたのだから詫をします。過去の罪の懺悔はそれまで、それ以上に深い意味もないのだから、どうぞ水に流して、そのやうな忌まはしい事は、すつかり忘れて仕舞つておくれよ、ね……………」

水に流して、下枝はその儘忘れて仕舞つたであらうか？  
先入主ともなつて居るのは、昨夜の夢。咲松とやらが尋ねて来て、門口のひそく話を、現の事と思ひ極めて居る妻は、規矩雄が懺悔を却て、過去のものとせず、邪推は彌々募るかの氣色が見えた。

同 情

【壹】

東都に近く潮浴に、最も好い所を數ふれば、随分多くあるが中に、大磯に



次いではこの鎌倉こそ、本場と名の付くものであらう。

その鎌倉も長谷寄りより材木座の端、由比が濱邊は殊に避暑客の出盛る所で、時も八月の初つかた、土用波の立つ憂はあるが、こゝにはあまり海月の泳ぐのもなければ、裸身の人の襲はれて、蚯蚓脹の難に逢ふ事もなし。

半鐘の下の砂山越えて、此所の脱衣場はその内にも繁昌の、若き男女が一樣に形通りの装をして、おのが心のまゝに海へと入りに行く中に、浴衣がけの十八九なのと、二十四五ばかりなのとの束髪の、いづれ此所らに泊り客に附添ふ婢らしく、預り物を一纏にしながら、年嵩のが何やら小言を言つて居る様である。

「私や、何もお前様達を苛める氣はないけれどもさ、何ぼ歳が行かないつたつて、お嬢様にもう少し、氣を付けて上げたら、どうだらうと思ふのさ。今だつて、私が——事に寄つたら海へ入らうかと思つて、水着を持つて来たか

らこそ、まあくだぶくでも何でも間に合つただけけれども、これ御覽、お前さん。」

とミシンがほつれて、右の腋の一尺近く明いてゐる、相形の水着を出して見せ、

「こんなに切れたのは、只今ではないに違ない。昨日浴びに入らしつて、お歸になつて、我家でざぶく水で洗つたのは、お前様なんだらう。その時、屹度——これほどの綻だもの、棹へ掛けて干す時にだつても、分らない筈はありやしないよ。それがもし、全く分らないで居るのなら、餘程のぼんつくだし、知つてゐて知らない振をして居るのなら、その仕爲振が可愛らしくないから、歸つたら奥様に申し上げなけりやならない。さあ、全く知らないでか、それともするてかえ？」

年下の方は、口元のしほらしい、髪の濃い、仇氣ない姿の婢である。伏

目になつて、自分の帯の模様を見て居たが、

「御免なさいまし。」

と幽にいふ。

「何、御免なさい？御免なさいぢや、さつぱり分りやしないよ。第一私や、お前さんにお謝まんないつて、さう言つてやしない、このお嬢様のお召しになるお水着の綻について言つてるんぢやないか。」

「ですから、御免なさいつて、私は申してゐるのでございます。」

「へえ。」

と妙に調子を引いて、

「ですから御免なさいは、いよく分らないぢやないかい。私やそんな曖昧なのは、大嫌なんだよ。まあ、返事をおし、返事を。全く知らなかつたのか、それとも、するけてしなかつたのか。」

「全く知らなかつたのでございますから、どうぞ御免なすつて下さいまし。」と静に頭を下げる。その面を仔細に覗き見て、

「全く知らなかつたのかえ？自分が洗つて、棹へ干して、乾いたのを仕舞ひまでして、而して、この大きな綻を知らなかつたの——まあ、何といふほんつく。なんだらう。」

と一旦は嘲笑つたが、

「嘘をお吐きな！」

と忽ち屹といふとある時、

「あ痛！」

同じ脱衣場に居る人が、その悲鳴に、何事かと振り返つて見るほどであるが、此方是一向平氣なもので、抓つて置いて身をつと摺抜けて、二三間先に居る。年下のは二の腕の所を、浴衣の上から抑へて、痛さを堪へては居るが、その

眼からははらくと落ちるものがある。

【貳】

一わたり脱衣場から、海へ飛込みに行つた大勢と代つて、砂を蹴つて、此所へ入つて来たのは、十二ばかりの少女を頭に、十ばかりの男の子と八つばかりの女の兒とである。

濡れて、砂に泥れた體を、鹽湯で洗つてもらひながら、いつもの例でその上へ大タオルを懸けて、冷飯草履を穿いて、宿まで駈け出して行くのが例で、今日もその事になる。

「お姉様、私、今日は餘程泳いで来てよ。」

と末の妹が言へば、

「さう。それはお愛でたう。」

と姉は姉らしく微笑で受けるのに、中の男の兒は大に笑つて、

「三四ちゃんのは、泳いで来たんぢやありやしないんだ。たい、脚をばたくくやる時だけ、體が浮くんだよ。脚を動かさなければ、直ぐに沈んで仕舞ふんだから駄目だ。」

と罵倒する。

「そりや、どうせお兄様のやうには、行きやしないわ。お兄様は男だし、それから泳の稽古をして居るんですもの。ねえお姉様、ねえ。」

我が加勢をしてくれよの目の訴に、

「親さん、三四ちゃんは仕方がないわよ、小さいから。私だつて、中々本當に泳げやしない位なんですもの。」

「女は皆駄目だ。」

と親は姉ぐるみ貶し附ける。

「駄目だつて、可わねえ、三四ちゃん。」

「ねえ。」

姉と妹は眼を見合つて、同じやうに首を曲げて頷いて居る間に、親の方はすたく先へ行く。

後から附いて行くのは二人の婢で。

「お嬢様。」

と年嵩のが呼び止めるので、

「何。」

と姉の方が、帽子ぐるみ振向く。

「貴女、あの私のだぶくした、水着をお召し遊ばして、お氣持がお悪かつたでございませう。申す暮らして居りましたんですよ。それといふもねえ、此の小夜が、昨日自分でお嬢様のを洗つて、干して、乾いたのを、疊んで仕舞つて置きながら、あの大きな綻も縫ふのをずるけて仕舞つたのでござ

「あら！」

「いますもの。私、今がた小言を言つて居つた所なのでございませう。」

と叫んで、

小夜に小言を言つたの？

「はい。思ふ様申して遣りましたのでございませう。何だつてまあ、何ぼずけるのが商賣だつて、濱邊へお出ましになるお嬢様にこんなものをお着せ申して、外聞の悪いなんていふ事を、全で知らないで、自分勝手にずるけて居るんでございませうから。」

「達や。」

と姉娘は女の言葉を遮つて、

「小夜を、そんなに小言を言ふのはお止しよ。」

達やお嬢様の仰こそ心得ねと、眼を圓くして、

「何故でございますか？」

「何故つて事もないけれども、水着位の綻で、小言を言ふのは可愛想ぢやないか。お止しよ。」

「でも、水着位と、お嬢様は仰いますけれども、一事が萬事で、今手綱を弛めて置きましたら、もつと大きな事を仕出しました時に、取返しがつきませんでございますから、私は歸つて、直ぐ奥様までさう申し上げて遣らうと思つて居るところなのでございます。」

「まあ母様に言つけるの？」

莞爾笑ひながら言ふ。

「はい、申し上げますとも。」

姉嬢は黙つて考へて居ると、妹の三四子が、

「可愛想だわねえ、母様に小夜が叱られてよ。」

達やは三四子に答へて、

「さうでございます。母様にお小言を仰つて頂かうと存じますのでござい  
ます。」

「あの、達や。」

と姉嬢が呼ぶ。

「はい。」

「お前私の水着の綻の事、母様に言付けるつて——ちやあ、歸つたら、  
私も母様へ申し上げるわ。」

その言葉の意を、一寸解せなかつた様であつたが、

「では、お嬢様も、先刻お水着をお召し遊ばさうとなさいました時に、あ  
んなに、大きく切れて居つたので、それは小夜が屹度するけて、かうして置  
いたのに違ないから、母様に後で言ひ付けて遣らうと思召しましたのでござ

いませう。」

此方は呑み込んで、

「さうなのよ。私、實際は先刻肝癢に障つたの。小夜つて人は、あんまりな人だと思つて、こんな事を度々されては困るから歸つたら、母様に言付けないぢやと思つてたの。」

と言つて居る間にも、尤も後から焼けた砂の道をすこく来るお小夜の様子を覗ひくして居る。

「ねえ、達や、早く歸つて母様に申し上げやうよ。」

「さう致しませうです。」

言つて居る折、もう一町餘も先に弟の親が、兩手を上げて姉達を呼びながら、此方に向ひたなりに飛退つて行くはづみに、路端のごろた石にはたと躓いて、後へ倒れる。

「お、危い！」

「危い！」

異口同音に言ふばかりか、達やが逸早くも救ひの爲に駆け出す。

後に残つた姉娘が、密に小夜に囁くやうは、

「達やは意地悪で困るわね。私はお前の加勢についでるから、どんな事があつても母様には叱らせないわ。大丈夫よ。」

お小夜は何も答へず、然しその眼に感謝の意を含ませて、人の知れぬやうに禮をしたのである。

【参】

子供等は宿へ歸るなり、風呂へはほんのざつと入つて、達や、小夜が其所で濡れたもの、始末をして居る間に、父母と共に己等の座敷になつて居る三階へ駆け上がつて、十疊、十二疊二間の、床の傍に椽より来る潮風を浴びて

編物に餘念もない母上の前へ出る。

「母様、只今。」

一様に禮をすれば、

「あゝ、今日はいつともより大層ゆつくりでしたね。」

の母上の言葉を、親が引取つて、

「それやね、母様、三四ちゃんも泳げるやうになるまで、浅いところで思ふ様ばちやく遣つてたから、それで遅くなつたんだ。」

見事水破抜くと、三四子は、

「あら！」

と言つた限で、後否な顔をして居る。

「さう言へば母様。」

と姉娘の八重子は小聲で、

と三四子も一所になつて、姉と割臺詞で、今方あつた出来事を語つた末に、  
姉が、

「今日もまた濱で、達やが小夜を苛めて居ましたわ。」

「おや、さうかい。何だつて。」

「それはね。」

「そりや、私の水着の綻の切れたのを、知らないで持つて来たのは、小夜だつて、うつかりしたんでせうけれども、何も、大勢人の居る所で、がみく小言を言ふ事はないわね。小夜は眞赤な顔をして居ましたわ。で、その事をこれから行つて、奥様に——母様に言付けるつていひますから、私もわざと、ちや、一所に母様に言付けやうつて言つといたの。本當いふと、早く母様にその事をお話して置いて、あんまりお小言を仰らないやうにして頂かうと思つてたの。ね、さうして頂戴なね。でない、達やの方が好い氣になつて、

なほと小夜を苛めていけませんから——小夜は、全く可愛想よ。」

「僕は、達公威張りくさつて居やがるから、大嫌だ。」

一本氣ながら親も、小夜への同情者である。

「さうかい、まあ、何故、あの人はそんなに意地が悪いだらうねえ。」

と母上はなほ編物の手を運ばして居る。

「ね、母様、私お願ひするのよ、あんまり小夜に、お小言を仰らないやうに、ね……………」

「え。」

と母上は領いて、

「それだけの事なら、別にお小言を言はないやうにしますよ。」

「それだけの事つて、母様、いつだつて小夜に悪い事はありませんのに、達やが無理な事を言つては苛めるんですもの。憎らしいわ。」

「小夜、今来る時、泣いて、ね、お姉様。」  
と三四子も言ひ繼ぐ。

「達は、もう少し下の者に、優しくしてやつたら可さうなものだのにね。」  
母上がさう言へば、

「え、本當よ、それに小夜は、よく母様が不斷から仰つてお居での、生が好い所の娘だから、達やはそれを羨ましがつて居て、それで始終苛めたくつて、仕様がななんだわね。」

「小夜は、お金持の人の娘でしょ？」  
と三四子は仇氣なく姉に訊ねる。

「え、さう。だけれども母様、それほどお金持の家に生れて、本當いふと、お嫁にも行かれる歳にもなつて居るのに、どうして小間使に出て居るんでしょ。」



母上はその間に答へて、

「それは、悉しく言ふと管々しいけれども、あの小夜の家の親類へ、一度お嫁に行くところだったのが、其先の息子さん——つまり小夜の旦那様にならうといふ人が、他の人を奥様にしたもんだから、それで小夜も一時がつかりして、鬱ぐやうな病氣になつたものだから、お醫者様は小夜に、氣の紛れるやうにと行つて、奉公に出る事を勧めたので、小夜の母様や父様といふ人も、その心になつて、丁度縁から縁の繋がつて居る我家へ、小間使に来る事になつたのさ。」

「では母様、何ね、小夜は女中といふよりはお客様のやうなものね。」  
母上はわづかに微笑んで、

「お客様といふ譯ではないけれども、あたりまへの奉公人の——それこそ、達や、なんぞと違つて、少し心を置いて使つて遣らなくつちやいけない人な

のさ。」

「ぢや、何ね、私達のお友達にしても可んだわね。可わ、ぢや是からお友達にしやう。ね、三四ちゃん、さうしなくつて？」

「え々、さうしませうね。嬉しい〜。」

と姉妹は打喜ぶのを、母上は寸時と制して、

「まあ〜、お友達にするのはいけませんよ。」

小夜はさういふ次第で、家へ来て居るやうなもの、表面は小間使奉公には違ないので。そのうちに氣鬱病も癒れば、生家へ歸して、再度の縁を求めさせる氣ではあるが、我家へ置く以上には、誰彼の用捨はなく、達も小夜も奉公人としてあるのゆゑ、お前達に注意して置く事は、可哀想だ〜と、小夜を構ふのは可いやうなもの、主人側であまりに、彼を構ひ立すると、却て下々の者の嫉から、達やのやうなものは、殊更小夜を憎むやうになるものゆ

る、今お前達がお言ひの通りに、此所へ達やが言ひ付けに来たならば、一應は小夜を窘めないでは、達の方の顔が立たない理であるからと、よく理を以て姉妹を含ませれば、もとより聞分よき彼等は、母上の語を然く心得た様である。

【四】

待ち設けて居る所へ、達やは小夜を連れて、綻びた水着を證據に、上つて来て奥様に之を示し、小夜が怠慢を何卒、懲らしやり下さるやうにと、輕薄な頭を下げる。

「さうかい。」

と奥様は受けて、

「今、その事は、八重子からも聞いたのですがね。小夜、全くお前様、知つて居てその水着の綻を直さなかつたのかい？」

「……………」

最も後に、恐れ慄いて居るのは小夜である。

「お小夜様、全くするけたんなら、するけたつて、奥様の前で白状したら可いぢやないかね。」

例の達やが厳しいのを、

「まあ、お待ちよ。」

と奥様は制して、

「小夜、私やお前に小言を言ふのぢやないのだけれども、不圖した縁から私のやうな家へ小間使といふやうな名で、来ておくれのやうなもの、もし主従の名前が、付かなければ、私の家は炭礦會社の社長なり、お前様の家は京橋で名高い呉服屋様で、財産は兎も角、資格の上で、小夜さんのお父様も我家の旦那様も、謂はゞ同等の人なのだよ。だけれどもまあ、かうやつて

奉公といふやうな名が付いて、来て居て貰へば、お前様の方もその氣になつて、矢張蔭日和なく勤めておくれでないぢや、實の所は困るのさ。しかし、この水着の事は、なるほどうつかりして居て、あながちお達のいふほどに、するけたの、怠けたのと、いふのでもなからうけれども、まあく〜やかましくいへば、事實として此所に現れて出たのに、かういふ綻があつて見れば、お前様だつて、まづは一言の言ひ譯はあるまい。また、達やの注意も無理はないところだと思ひます。

まあこの位の事だから、まだよろしいが、これが他のむづかしい事に、不圖かういふ事を重ねてしておくれだと、私の方でも考へなくつてはならない事もあらうから、これからもある事と、よく〜氣を付けておくれよ。

達やはまあ、いつも〜細い事によく氣が付いて、言つてくれる。家の爲、私達の爲を思へばこそ、私達の目の及ばない事に注意しておくれなんだから

お前もまた、これからも、此方の氣の付かない事は、よく〜さう言つておくれよ。

あ、柏原の家に、お前のやうな忠義者が居るので、私達もどんなに助かるか知れやしないよ、難有う、難有う。

誰へも彼へもよいやうに、さすがに世馴れた奥様の取爲に、さてこそ手柄と獨り誇りかのお達より、一向恐縮するのは小夜で。

「この後は、心を付けますでございませうから、どうぞ御免し下さいませうに。」

「あ、よいよ〜。」  
と奥様の面はいつも和らいで居る。

小夜——彼は元、八杉規矩雄の許嫁であつた、八杉家没落に先つて、従兄弟同士の許嫁であつたのであるが、彼の藝者狂より心は轉じて、下枝を妻と

して迎へた。それより小夜は痛はしい、失戀の人となつたのであるが、こゝに小間使奉公の勤をなし、腹黒きお達たつに苛さいまるゝとは言へ、彼はそれ以上のある忌まはしい大難をば免るゝ事を得て居るのは、まだしもの幸運なのである。

濱 傳

【意】

此ほどになつても、忘られないのは八杉規矩雄の上の、あの時機よくてその人の妻と迎へられ、よしその家は産を破つても、良人を愛する心は變らず、見ん事操をも立て通さんず一筋の氣の小夜は、素性も知らぬお達風情に苛まれて、なほ涙を呑み、口惜しさを忍び堪へなくてはならぬほど、規矩雄さんさへ仇し心こころがなかつたならばと、つひその事の思ひ出されて狂しく、

不圖庭下駄に砂山越えて、下り立つ濱は眞晝のやうな月の影。

海は白く、逗子の濱を東に、普賢像山の薄靄より、南の果は稻村ヶ崎の、ちらつく燈は長谷寺か、遠く鳴り響く鉦の音も尊く聞えて心も清むほど、自からに獨り行く道の淋しとは思はれず。

「奥様や、嬢様達が、よくして下さるから、我慢をして居るやうなものだけれど。」

と小夜は言葉に出して、

「本當に、お達さんのひねくねした事といふものは！」  
後を口の裏に、何やら唧つ様であつたが、やがてその思の變つたらしく、

「さういへば、今規矩雄様は何所に入らつしやるか知らん？」  
宿に泊る人のすさみか、横笛に合はす琴の音の、

「あゝ、規矩雄さんは、確、笛がお上手であつたつけ。」

我も少しは手馴れたる爪琴の、時が時ならばあのやうにこの鎌倉へ、手を携へて遊びにも来て、共に合奏する事などのあらうのに！

「あゝ、もう／＼そんな事考へたつて、仕様がな。止しませう、止しませう。」

見上ぐれば月は清く、さし来る潮の上に影は踊つて、晝の暑さをも拭ふが如く、寧ろ、冷や／＼かなと思ふばかりの涼しい風が、小夜の面を霞める折から、足音はなけれど、後にある人の氣色に、此方も見返れば、月に蒼き色ながら、粹に、美しき潰し島田した、いふまでもなく素人ならぬ、眼に嬌の深き女の姿。

「あの………失禮でございますけれども。」  
と小夜の面を覗くやうにして、

「もしや、貴女はお小夜さんではございませんか。」

「はあ。左様でございますか………。」  
答も待たず、彼方はさも嬉しうに我が手を取つたが、女の手の氷かと思ふやうに冷きはいかに？

「あゝ、矢張さうでございましたか。どうも私、先刻から、さうではないか知らんと思つて居りましたのでございますよ。」

美しき女はさも親しげに話しかけて、

「あの、貴女、光明館にお泊りで入らつしやいますんでしょ。私知つて居ますのよ。私はつひあの前の、獵師の家を借りて、姐様やなんぞと来て居ますんですの。」

皆、氣の置けない、陽氣な人ばかりの所なんですから、遊に入らしつて下ろさ。

「まあ、お小長さんには、いつお目に懸かつたばかりでございましたらうね

え。」

「いづお目に懸かつたよりも、何よりも、小夜の記憶には、このやうな粹な人に知己はない筈であるのに、むしろ稀有な顔をして迎へれば、

「あゝ、貴女、私をお忘れなすつたのね。檜の屋の咲松でございますよ。」  
檜の屋の咲松！ 名を聞いて直ぐに思ひ起したのは、その當時規矩雄とそ  
の仲の睦まじかつた葎町の藝者。

この女ゆゑにこそ規矩雄さんも心變りをして、自分を振捨て、仕舞つたものと思へば、その頃某の雑誌の巻頭の寫真に、はた繪葉書に、其人の面影さへあつたなら、必らず破つて捨てたほどに恨めしかつたのう、その後規矩雄の再心變りして、今の奥様を迎へたる、咲松と自分は生れこそ遠へ、同じ規矩雄に捨てられた人よと哀にも思つた事はあつたが、ついで逢つて話も仕懸けた事はない筈であるのに、向ふからは却て馴染でもあるかのやうなの

を、無上にすぎなくも仕兼ねて、

「あゝ、咲松さんでございましたか、つひ、あの、お見外れ申して居りました。」

「否あね。お見外れ申したゝなんぞつて……………」

咲松はさも樂しげに笑つて、

「貴女、お一人で濱をお歩きなのね。お供させて下すつて？」

元より否むべき事でもないので、

「えゝ、どうぞ。」

咲松は嬉しげに、小夜と共に露けき砂の上を行く。

【貳】

「お見外れ申したゝなんぞつて、そんな他人行儀な事言ひつ事なし。かうしましよ。これからは貴女と私と、姉妹になりませうよう。」

姉妹。可わ——失禮だけれども私が、年上だけに姐様——否な、姉様だわね。

正直な所、貴女の方ちやお見外れ申したか知らないけれども、私は初から貴女を知つてたのよ。極端には八杉さんから貴女のお噂は伺つて居ましたの。それから度々、お芝居や縁日なんぞで、始終お目に懸かつて居ましたらう。あら！また變なお顔をなすつて——否あねえ、忘れてお仕舞ひなすつたの？」

彼は、おつほつほつほとばかり、面白氣に笑ふけれども、全く小夜にはその覺はないやうなので、なほ寸時默然として居る。

「伺へばねえ……………」

と咲松は調子が沈んで、

「貴女も、規矩雄さんにはお見捨てられなすつたんだつてねえ。」

まあ、私なんかは可うござんすわ。こんな稼業をして居るんですから。どうせねえ、先様だつて初から、玩弄具にして入らしたのでせうから。

だけれども、貴女はまたそれと違ふんだわねえ、貴女は規矩雄さんにとつては立派に、お父様もお許になつた、本當の御新造様で居らつしやるのに、それをまああんな女學生上りの——何ぼ、軍人のお嬢様だつて高の知れた、薄生意氣な女に見替へて仕舞つて、これまでの約束を丸で、揉みくしやにするつて法はありやしないわねえ。

まあ、私の事なんかどうだつて可わ。私は二の次にしても、貴女の事は本當に腹の立つ事なんだわ。

尤もそりや、彼方も、あの女をお嫁さんにした所は可かつたけれども、直に——一年と〇たないうちに、お店はあんな事になつて仕舞つたもんだからそんな事を言つちや何だけれども、今ぢやもう見る影もありやしないのよ。」

「それでは、あの。」

小夜は不圖言葉を挟んで、

「今の、規矩雄さんに貴女、お逢ひなすつて？」

咲松は頷いて、

「え、逢つてよ、度々。けれども譯があつて、私から一切話をしない事になつて居るから、向ふぢや屹度知らない位なんでせう。」

「で、何所に住んで居りますのでございます。」

「八杉さんのお居での所？」

「はあ。」

咲松の美しい眼は月に光つて、

「それをいふのだけ、堪忍して頂戴よ。それを私に言はせるのだけ、勘辨して頂戴よ。ね、よくつて。」

小夜の方で、他の事は兎も角も、知つて居るなら咲松から、規矩雄さんの居所を聞いて、さりとて端多ない格氣に、その人に逢つて恨を言ふ事などはないけれども、逢ふ事も出来たなら、昔馴染に逢ひたい思ひするので、強ひて住所を知りたいのも無理はない。

「あの、もし貴女御存じなら——誰にも申しはいたしませんから、どうぞ、どうぞ。」

「い、え。」

と遮つて、

「それだけは御免蒙りよ。」

言つてから少し考へて居たが、

「ぢや、かうしませう。此頃に折を見て、私が貴女を、その規矩雄さん所へお連れ申して上げませう。ね、それが可いわ。」



その代、きつぱりお約束して置く事は、貴女に八杉さんを逢はして上げて  
も、貴女は一切、お言葉を替はしなすつちやいけない事よ。可くつて。

そのお約束さへ、堅く守ると仰るんなら、今度折を見て、八杉さん所へ  
お連れ申ませう。」

小夜は考へく。

「あの、逢へましても、言葉を替はす事はならないのでございませうか。」

「ならない譯ぢやないけれども、まあ、いけないのよ。」

「どうしていございませうか。」

「どうしていも。もう、さう根掘り葉掘り聞くんぢやなくつてよ。」

勃然としたかの如く、咲松は早口で言ふ。はつとして内氣の小夜は、次の  
句もない。

【参】

しばらくすると天には群雲が起つて、不圖月が曇る。

「貴女、黙つてちや否、兎も角も、そのお約束をなさいよ。」

と咲松が言ふ。

「あの……………」

小夜は口籠つて、

「規矩雄さんに逢はして下さる代に、話を仕懸けちやいけないつて事でご

ざいますか。」

此方はたい領く。小夜は更に考へたが、

「え……………。貴女が逢はして下さいますのなら、そのお約束を致してよ

ろしうございます。」

「さう。約束をして下さるの。」

とさも安心したやうに、

「それで、私も嬉しいわ。」  
後を莞爾したが、また思ひ返す所があつたらしく、

「あら！でも、話を仕掛けないつて、此所ちやさう言つて置きながら、其場になると、不意と——あむまり、久しぶりに逢つた懐しさに、口を利く事になるまいものでもない。さうすると私も氣まづいから、まあ、矢張逢はせて上げるのは止ませう、止ましょ。」  
と早口に言つて、すたく先へ行く。

「あら！」

小夜は慌て、

「私、お約束した事に、屹度違はございませんから、一目——唯一目で宜しうございます。どうぞ規矩雄さんの顔の見られるやうに、御案内なすつていただきますし。」

「さうね……………」

咲松はむしろ焦らし氣味の口吻であつたが、

「可わ、可わ、可わ。」

と早口になつて、

「他ならない、妹のお小夜さんのお頼だから、ちや、矢張八杉さんに逢はせて上げませう。だが、屹度よ——貴女。」

と後を眼で言へば、小夜も呑込んで、

「大丈夫でございます。たい、顔を見るばつかしでございます。」

と決意したやうに言ふ。

「さう。ちや、まあ可いけれど。」

と何やら打案じて居るほどに、

「ね、そのお約束の記號に、何か、取交して置ませう。つまり、私は屹

度貴女を、規矩雄さんのところへ、連れて行つて上げるといふ約束。貴女は規矩雄さんに逢つても、どんな事があつたつて、口を利かないといふ約束……、お互に、堅いお約束をする爲に、何でも可いから取交して置ませうよう。」

と咲松は、自分の右の無名指に嵌めて居る指輪を取つて、

「あの、これはね——見れば分りますけれども、金で萩の花が彫つてありませう。私、花の内萩が一番好だから、簪でも、襟でも、替紋なんかにも萩を使つて居るの。露は眞珠ですけれども、これでも大切にしていゐる指輪なのよ。まあ、私から言ひ出し鬼だから、これを貴女へ——お約束を違へない記號にお渡しして置ませう。失禮ですけれども取つといて頂戴。」  
と手渡しする。約束を守る事は堅いが、小夜はその記號を咲松に與ふべく、何物をも手にして居ないので、少しく困じて居る色を見て、

「さうね、貴女はたい、一寸運動にお出なすつて、浴衣がけだつたり何かするのだから、何もそこにお持合せぢやござんすまい。可わ、可わ。もうも、貴女の事だから大丈夫だと思つてよ。」

まあ、失禮ですけれども、その指輪だけ取つて置いて頂戴。」

一度臙になつた月もまた冴えれば、

「あ、さうく。私、これでお別れますよ。ぢや、私からお誘ひに行きますわ。折を見てね、その時まで待つて居らつしやい！」

小夜の眼に、我が面を忘れな印象を止めさせやう爲め、咲松から見入つて居る事がやゝ寸時であつたが、脚元にさつと打寄る白浪の、氷のやうに冷たいのに、小夜が驚いて飛退く時、今まで在つた咲松の影はなく、已一人は濱に取殘されて、小坪のあたりからかゝり初める霧に、沖は暗いのである。

「お前様、まあ、何所から何所へ行つて居たのさあ。先刻から、随分長い間よ。一人で何所へ行つて居たのさあ。」

例のお達が、底意地悪い聲音に、驚いて我に返つたやうな心地の小夜は、つひ今方まで濱を歩いて居たかと思ふのに、身は宿の庭の小松の影に、佇んで居るのである。

四方は夜も更けた様に、今までの月こそ呀ゆれ、霧は遠近に深く、宿の内外も寂として、先刻聞こえた琴の音もなければ、人も大方寢静まつた氣色に、

「まあ、今まで私は濱を歩いて居たのか知らん？」

獨言のやうに言ふを引捕へて、濱を歩いて居たのか知らんだつて？何を相變らず白張つて居るのさあ。今お前様何時だと思ふの。もう彼は十二時よ。この夜更小更に何所をほつつき歩いて居たんだね。」

なるほど同じこの庭から、濱へと下りて行つた時は、あのやうに賑かな、露の口であつたのに、なるほど海邊で咲松といふ藝者に逢つて、話をして居たといふやうなもの、あれだけでそんなに時間がかつたといふ事の、あの譯がないと思ひはするが、またうつかり口返答をして、お達に苛まれるのが辛さに、

「つひね、あの、あんまり濱が涼しくつて、それにお月様も佳いもんですから、うかくくと遠くまで行つて。」

「うかくとぢやないよ、お前様。奥様や嬢様方が、どれほど御心配なすつて居らしたか、知れたもんぢやありませんよ、お前様。」

「まあ、奥様や嬢様までが、御心配なすつて居らしたつて。」

「さうともね。」

「濟まない事をしましたわね。」

お達はせゝら笑つて、

「濟まない事をしたもないもんだよ。一體、何所の濱邊を歩いて来たんだか、知れたもんぢやありやしない。」

「いゝえ。」

と小夜は眞顔で、

「何所へも行つたのぢやございません。獨りで、ぶらくお月様に浮かされて行く内に、不意と珍しい、知つた人に逢つたものですから、いろくお話をしたり何かして、歩いて居る内に、遅くなつて仕舞つたので、お達さんにも御心配を懸けて、どうぞ御免なすつて下さいまし。」

「珍しい、知つた人に逢つたのかえ？ 濱邊で以て……。」

「はあ。」

と小夜が答へる時、一わたり潮風が松を鳴らしたので、亂れかゝる後れ毛を

拂はうとすれば、敏いお達の目に入るは小夜が指のあたりの輝である。

お達も、はじめはたい何かと思つたいけであるが、どうか氣になつて、再び仔細に小夜の指を改めると、これは抑、つひに見馴れもせぬ寶石入の指環を嵌めて居るので。

「おや、お前様、立派な指環をして居るぢやないか。」

小夜も全くさういはれるまでは、忘れて居た指環の事。約束の事。

「あ、これでございますか。」

うつかり咲松から贈られた事を、打明けやうとする刹那、何者とも知れず、その耳に囁くものがあつて、決してその事を語るまい。秘し隠して居なくつては、首尾も悪からうと戒める言葉のあるやうなので、

「あの、これは……。」

後を言濁して仕舞ふのを、直ぐに悪推したお達は、

「あら！お前様、珍しい、知つた人に逢つたつて、その人に貰つて来たのだらう！」

星を刺されて、小夜の愕然とした色を、

「そら、當てられて喫驚した顔！分つたよ、分つたよ。濱邊で遅くなつたのも、それで次第が分つたよ。この夜更にお月様に浮かれて歩いたのも、すつかり私には分つちやつたよ。」

だけれども、お小夜さん、何だつて、この世の中で、隠し事ほど出来ないものはないよ。直ぐそのやうに、化の皮が顯れるんだからねえ、だから恐ろしいつて言ふんだよ。

まあ、恐ろしいつて言ふのは、どつちかつて言ふと、お小夜さんの度胸を言ふんだわね。人の目襖を偷んで、珍しい——懐しい、可愛い人と逢引をして……。

あゝ、さうとは御存知なく、お小夜さん思ひの奥様方は、お前様の行く所は知れないもんだから、いつもより遅く、今以てお座敷にお目覚めで、御心配遊ばして居らつしやるだらうぢやないか。あゝ、さうく。」

と俄に思ひ立つたやうに、

「直ぐにこの事を、奥様の所へ行つて申上げて、指環の事まで、お耳に入れて来なくつちやならない！」

何と感違へてか、小夜はさしも心元ないのに、

「まあ、お達さん。」

と止める間もなし。悉しく話す時もし、押へられた袖を振もぎつて、庭傳に奥まつた座敷の方へ。

小夜は指環を見入りながら、これゆる我が身の上に、忌々しい事の起るのではないかと啣たれて。

指環

【壹】

小 柏原夫妻は今朝何かの拍子から、江の島行を思ひ立つて居たが、なほ主人の發議で、舟をしつらへて海上を直行しやうとあるのに、子供等も嬉しく、同意したのであるが、夫人が飛んだ舟嫌の爲、この計畫は忽ち毀れて、野暮でも極樂寺坂から電車鐵道と極りの、お供は例のお達、それに小夜も加へられて、まだ朝曇の、禿げると熱くなるは必定ながら、この間につゝと切り抜けて、辨才天の奥の院の怒濤に涼まんといふ事に、支度萬端調つて、長谷寺の下までがらくと車にした。

それから形は如く電車に乗つて、早くも渡る行合橋の上。

「ねえ、一寸貴方。」

小 説 情

と夫人は主人を呼んで、

「江の島は金龜樓になさいますか。いつもの恵比須屋になさいますか。」

と考へて、

「恵比須屋は鳥居を潜ると、直ぐに下駄が脱げるだけ便利だけれども、さて山へ上るとなるとまた直汗だ。そこへ行つて、面倒のないのは、づゝと坂を上りつめての金龜樓で、浴衣がけになつて、巖窟へ行く一件なんだが、お世辭つ氣のない所、また彼所の料理と來ると、至つて無味いからなあ。さて兩方に長短あり。何方にしたら可からうか。それとも全く式を替へて、兒ヶ淵の上あたりで、下にはどぶんと藻線り込む、生藩のやうな海人を見ながら榮螺の壺焼を三つづゝも皆に當てがつて、そのまんまで歸つて來れば、誠に以て安上で濟むけれどもなあ。」

「榮螺の壺焼、僕は好だ。」

と親が叫ぶと、

「私も、好よ。」

「私もよ。」

八重子も三四子も同じ事なので、

「やあ、かういふお客様ばかりあつた日には、江の島の料理屋上つたりだ。」

と主人はさも面白げに笑つて、

「奥方、それならこの同勢は榮螺式御料理で、晝食を済ますとするか。」

至極真面目でいふのに、夫人はいつか釣込まれて、

「何ば、何でも貴方、そんな壺焼位で歸つても來られないぢやありませんか。」

「それでも、令嬢や、令息諸君は御同意なんだから、それも捻つて、洒落れて居て可いぢやないか。」

「真逆、貴方。」

と夫人は、車中同席の人への聞えは更なり、供の者に對しての面目もあるので、切に不同意を稱へて、何でも金龜樓か、惠比須屋のどちらかへ少憩をしなくては、外聞が悪いやうな意味の事をいふ、

「悪く見え張るんだね。」

と主人は高らかに笑つて、

「お前のは、それや江の島見物でなくつて、惠比須屋見物だ。さもなければあの怪しげなこの膳附の金龜樓の料理が喰べたいばかりに。」

「まあ、御常談はお後になすつて。」  
と夫人が遮つて、



「兎も角も、恵比須屋あたりへお休みになりますか。」  
今度は主人も大人しく、

「兎も角も、恵比須屋あたりへ、お休みになりますか。」  
と夫人の声色を使つて、中同を笑はせる。

「貴方。」

と此方はうるさげに、

「何方になさいますの？ 本當に。」

「金龜でも、恵比須でも、はたまた榮螺の壺的でも、何とも和御寮の御計ひだ。」

夫人はあまりの無駄口に、寸時黙つて應じなかつたが、少し離れた席に居るお達を近くへ呼び寄せて、

「お前ね、一足先へ恵比須屋へ行つて、今後からこれだけの人数が行くか

らつて、さう前知らせをして来ておくれでないか。」

「はい。」

と達やは主人の前、珍しく寡言に答へる。

「やれ、御大層なお客様が恵比須屋へ舞ひ込むぞ。」

主人のほぐらかしを聞かぬ振をして、

「御苦勞だが、お前へこの電車で行つておくれ。私達はこの先の、腰越で下りて、七里ヶ濱を小供達が歩いて行きたいといふから。」

「や！」

と仰山に驚いたのは主人で、

「この暑いのに、七里ヶ濱を歩かせられるのかい！」

「まあ、貴方は黙つて居らつしやいませよ。」  
と常談口を制して置いて、

「ぢやね、達や、行つて来ておくれか。」

「はい。でございますが、いづぞやお供いたしました時のやうに、電車の下ります所に恵比須屋の宿の者が、居りますやうでございましたら、それへ申し付けまして、宜しうございませうか。」

「無論、それで充分だ。」

と良人が頷くので、夫人は否み兼ねて、それならその都合でも可いやうにと。とある内に待ち設けた腰越へ来て、お達を残して一同は下車。

車上から向ふは首を出して、

「お先へ参つて居ります。」

【貳】

まだ、どちらかといへば朝涼の今であるのに、主人が杞憂したほど、暑くもない七里が濱の、日もまだ赫とは照らぬので、先に立つ親が小石を取つて、

は、ダックス エンド ドレックスを試て居れば、八重子、三四子は行く路に貝を拾ひ取りく。それに附添つて居る小夜を、夫人は後から招きたまふ。

「お前に、些ばかり話があるんだけどね。」

小夜は昨夜の事のお達の口から早くも奥様のお耳へ入つて居る事と思へば、いと恐縮の色をする。

「いゝえね。」

と夫人は小夜の面を覗つて、自分の日傘の内に入れて遣りながら、

「いつもだと、屹度傍にお達が居るもんだから、お前様にやおちく話も出来ないので、今日の江の島行を幸ひ、あの人を一步先へ遣つて仕舞つたから、謂はゞ邪魔は拂つたのだよ。」

まあ、あの達の意地悪ぢや、お前様も大抵苦勞もして居るだらうつてね、

八重や三四なども、いつも小夜が可愛想だつて言ひ暮らして居るのさあ。

もう、水着の話だつて、私の方ぢやちやんと知つて居る事なので、よしやお前様が綻の切れたのを、うつかり縫つて置かなかつたからつて、さうく叱る事もないけれども、また達が、あのやうな忠義立にいふものを、小夜はそんなするけやぢやない。お前の方が、餘程陰陽があつていけないと、遣り込めて遣り込められない事もないけれども、さうするとまた、裏へ廻つてお前様達を彼が苛めるといつたやうな風で、誠にあの人ぢや困つて仕舞ふんだがねえ。」

さう言つて居る間に、夫人は密に小夜の右の無名指に注意をして、なるほどいつにない眞珠の指環の輝いて居るのを見るにつけ、不意と思ひ付いたやうに、

「おや、お前様、今までにつひぞ見懸けなかつた、好い指環を嵌めて居る

ぢやないか。」

はつとしたかの如く小夜は急いでその手を袂に隠す。

「あれ、まあ！どうして隠すの？」

夫人は何気なさうに粧つて、

「大方、疾から持つてお居でなんだらうけれども、つひぞ私の方が見なかつたもんだから、それで初めて気が附いたのだらうよ、ねえ。」

と我からわざと打消すやうに、

「それはさうと小夜、お前様、昨夜大層遅くまで、濱の方を歩いて居たつて、さうかえ？」

さてこそ奥様の、しとくと自分を窘められるのであらうと思へば、更にく気が咎めて、聲も出ぬほどのを努めて、

「はい。あの——お達さんから伺ひませば、奥様や嬢様方が、大層御心配

遊ばして下さいましたと申す事で、恐れ入りましてございます。」  
夫人は微笑んで、

「昨夜かい。何、私達はお前さんの外へ出て行つたのを知らなかつた位なのだよ。今朝、實は達から聞いて、おやさうかいと言つたのさ。」  
さてはお達の、また好い加減の事を言つて居るのかと、昨夜の口を考へれば悔しく。

「で、嘘だか何だかさう言つてたよ。お前様がねえ、濱へ出て行つて、前から知り合の男に逢つて、長話をした擧句に、立派な真珠の入つた指環を貰つて来て嵌めて居るつて。そりやもう、彼はねえ、有る事ない事私の耳へ入れるんだから、うるさくつてく仕様がありません。」

それはもう、私や誰より彼より、小夜を信用して居ます。といふものも、育が歴として居るばかりか、いろくの苦勞もして居るお前様の事だから、

その心を思ひ遣つては居るのだがね。

こりや私が疑つて、どうかうといふ譯ぢやないけれども、達をはじめ世間の口といふものは随分うるさいものだから、年頃になつて居るからこそ自分で自分を、よくく意を注げて、前後の仕事をしないといけないよ。

お前様に就ては、さらくそんなさもしい事はないと、承知しては居るけれども、昔の言葉で言へば魔の映すといふ。さういふ事は、時にないとも言へないものだから、何事にも氣を締めて仕ておくれでないと、第一お前様の阿父様から預つて居る、私の謂は責任になる事でもあるんだからよ——こんな事は言はないでもだが、その上にもお前様の爲可かれと思ふ心から、くどいやうだけれども、意見がましい事を言ふの。悪く採つておくれでないよ。

## 【参】

小夜は歩きながらとは言へ、奥様が此の身に同情して、其の爲可かれと數

々の論には、涙の出るほど有難く、謹んで聴く所であつたが、砂の上を踏む草履の音も静に、小半町も行く間に、奥様はなほ語を發して、

「お前、その指環は、矢張私が思ふ通り、仕舞つておいたのを、不意と儼める氣になつて出したけなんだらう。達がいふやうな事は、全くあつた話ぢやないんだらうねえ。」

その調子は稍嚴である。

「で、まだ達はさう言つて居たよ。濱で、お前様は珍らしい、知つた人にお逢ひだつたつて——私や、達の言ふ事を皆が皆、眞に受けるのではないけれどもね、彼はあゝいふ氣の女だから、度々もいふ通り、忠義立に言ふ事を、全で捨てるのも善悪だし、また、お前様にもさういふ事が、本當にあつた事なのか、どうなのか、一應聞いて置きたいと思つて居たのだがねえ……。」

この指環をくれた主は？月の夜を共に濱傳した咲松といふ藝者から——そ

れが珍らしい、知つた人である事を、他ならぬ奥様へ申し上げる事なり、また自から疑つてお居でになるらしい奥様の仰事を酌んで、由ない身の濡衣も干したく、打明けたさは山々ながら、さうと思ふと忽ち、自分の耳に囁く何者か、あつて、あの指環は秘密の事。また咲松との云々の趣は、たとひどのやうな方にも、話してはならぬものよと、戒を聞くが如く言はうとする口は吃して終に言ひ淀んで仕舞ふほど、奥様はどうやら忌々しげな御面持である。

「お前様、達やなんぞには兎も角、私だけにはその事を、話してよい事なら話しても可ぢやないかえ。」

「はい……。」

と僅に答へて、

「いえ、決して申し上げられません事ではございませぬけれども……。」

「申し上げられる事ならば、ね、私だけに話してお聞かせな。え？」

「はい……………」。

「誰にも言つてくれるなつて言ふのなら、そりや決して、旦那様にだつて子供達にはなほの事言ひはしませんよ。」

「はい……………誰有うございます。」

「ね。言へる事ならお言ひ。何方かといふと、私にだけはその事を耳に入れて置いた方が、お前様としても都合が可からうと思ふから。」

「はい。はい……………」。

「ね、でないと——また達やを初め、傍の口もうるさいから。何、私さへ胸に納めて置きさへすれば、誰が何といはうと、別に心配な事はありやしないからよ。」

「はい。はい……………」。

小夜はたゞさう答へるばかり、伏目になつてしとくと砂の上を行くばか

りであるのを、

「それとも小夜、指環の事は、どうでも打明ける事が出来ないのかい。」と稍厳しさに返るので。聞く小夜は慌て、

「いゝえ、決してさういふ譯ぢやございませんけれども……………」。

「さういふ譯でないのなら、私にだけ話をして置いた方が爲だらうよ。」

「……………」。

「それとも達て、打明ける事が出来ないものなら、これまでお前様を信用して居た事も是まで、この後の小夜といふ人は……………まあねえ、世間普通の女と同じやうに考へるから。」

「まあ、奥様！」

と小夜は叫ぶのを、

「いゝえさ、さうなると私や、この後は達やの言ふ事を否でも信用しなけ

ればならないやうになるから、さう思つておくれのやうに。」  
語をぶつりと切つて、小夜をそこへ取残して、遙の先に睦んで居る子供等に近づかうとするのを、

「奥様！ どうぞお待ち遊ばして。」

と呼びかけるのに、彼方も優しく見返つて、

「なら、話してお聞かせか。」

「はい。」

耳に囁くもの、ありと思ふのは、氣の故であるものを、藝者でこそあれ、かうくした事で、約束の爲に貰つた指環の次第を、他の人に打明ける事か、尊い御主人様に物語るは、別に羞かしい事でもなく、この後の濡衣の忌々しさを思ひ合はせて、自分でも今この時、せめて奥様へだけは申し上げて置いた方が、都合が可いやうにも考へるので、いつその事——打明けての意を決

して、今きつぱりした返詞をしたのであつたが、奥様がいつもの優しいお色で、却て自分の意を迎へられるやうなものにも、いざ語らうとすると又重ねて耳に囁く者があつて、例の言ひ澱む。

「どうおしなの？ 愚頭々々して。」

「……………」

「え？ どうおしなのさ。」

と奥様はさも焦れたげの御仰。

「……………」

なほ言葉のないのに、

「ぢや、いよく話す事が出来ないのだね。」

きつぱりした調子に、身も顫ふばかり、小夜は忽ち砂の上へ伏し倒れて、

「奥様、どうぞお免し下さいまし。」

湯 殿

【三】

相模灣の眺は四季折々に變る風情、常に賑ふ江の島の辯才天、之を本尊に數十軒の旅舎軒を列ね、宿引が腰より下を折べしよる間に、門を通る客を上目で熟と見込みの、燕か蟬の鳴き聲の如く、轉る事の中々にうるさき。

是は先様御存じ、惠比須屋の樓上は、この盛夏を書入の事として、五層の座敷の間毎々に遊客溢れて、さも繁昌を見せて居る様である。

樓下の風呂を出たばかりの、浴衣がけの二人の藝者、螺旋の階段を上つたる四階目の座敷に入れば、我等を連れて來た『旦那様』達は、酒に吞まれ、饒舌りくたびれて、今日日盛を晝寝して居る中に、獨りぼつんと——我等より先へ湯上の姐様が、次の間の椽にもたれて居るのである。

「姐様、姐様、姐様。」

耳に口を寄せらるゝを、

「暑つ苦しいぢやないか、内證話でも離れて居ておしよ。」

叱られて一時は萎げたが、

「いゝえ、松吉姐様、今湯殿で不思議な事があつたのよ。」

とは、もう一人の方の藝者が言ふ、松吉はその方へは振向いて、

「どんな不思議な事があつたの？光ちゃん。」

「いゝえね、姐様。」

と叱られた方が懲りずまに出で、

「湯殿で、咲松姐様に會つたのよ。」

その顔をしばらく見て居たが、いつもの通松吉は笑つて、

「また、久し振で初まつたよ。どんなに娑婆に思ひが残つて居るか知れな  
いけれども、江の島くんだりまで私達を追懸けて來る幽霊があるもんかね。」



これでまた箱根へ伸せば、箱根へどろんくと遣つて來られちや往生だよ。  
光子は一向眞顔で、

「松ちやんのいふのは、本當の事なのよ、松吉姉様。それはく、歳こそ少し若いけれども、亡つた咲ちやんに、寸分も違はないといふ、勿論素人ですけれども、女の人に今湯殿で、ばつたり出會したのよ。」

「あ、咲松に似た人かい。また幽的ぢやなかつたのかい。」  
と笑を續けて、

「私や、小松のお極がはじまつたのかと思つたのさ。」

「さう仰るけれども、姉様。」

と小松は。

「魂つてもものは全くあるもんだつてよ。ねえ光ちゃん。」  
と味方を一人頼んで置いて、

「もし、今湯殿に居た女の人が、咲松姉様の本當の魂だつたら、姉様、一  
邊逢つて上げて頂戴よ。」

姉様は茶にして笑つて居るばかり。二人はいと恨めしく、  
「ねえ。」

と互に顔を見合はして、いつそ姉様を餘所に、話をした方が可とは、心と心  
に通じ合つたもので。

「本當に、世の中に似て居る人が多いつて、今の女の人ほど瓜二つといふ  
のは、勝頼様以降ありやしないわね。」

「あれは女の勝頼様ね。」

天晴名洒落を言つて居ると、松吉は一向可笑しく、それで黙つて居る。

「だけれども、前の咲松姉様に、妹があるつてえ事は、聞いた事がないの  
だから、矢張彼の女の人は、他人の空似なのかねえ。」

「他人ぢやないよ。何ぼ空似だつて、あんなによく似たのはありやしない。屹度咲松姐様の本當の妹さんに違ありやしないわ。まだ咲松姐様が居た頃に、その話が出なかつたからこそ話もしなかつたんだわ。咲松姐様には、妹さんがあつたに違ないのよ。」  
と獨り極めて居るのは光子で。

「妹なんて、ありやしないつて、咲松姐様は確にさう言つた事を覚えて居るわ、私。」

「ぢや矢張他人なのかねえ、をかしいわねえ。あゝ、それから。」  
と思ひ出したものがあつて、

「それに松ちやん、顔が似てるばかりか、不斷お座敷へなんぞ、咲松姐様が嵌めて行つて居た、萩の花に眞珠の附いてる、指環を嵌めてるのを見たぢやないか。」

「さうく、指環まで咲松姐様と同じなのをして居るとは、珍しい事もあ  
るもんだと思つて居たのねえ。」

【貳】

松吉は不圖聞耳を立て、

「萩の花に眞珠の入つた、指環を嵌めて居たえ？」

「さうよ、さうよ、松吉姐様。」

光子に續いて小松が、

「姐様——私や、その指環を見ないまでは、たい、まあよく咲松姐様に似た人もあるものだ、たい思つてたばかりだつたのが、上り湯を取らうとして、私の傍へ來た時、見る氣もなく見たのが、その女の人の右の手の指環なんです。」

「指環は。それ一つしか嵌めて居なかつたわね。」

と光子が言へば、

「え、さう。けれども彼所の湯殿は薄暗い所なのに、あの眞珠から青いやうな光が映したので、私はもう、こりやてつきり………と思つて慄然としたの。」

松吉は考へて居て、

「此間も、さういへば福松の事があつたつけねえ。」

「平打？ あれも不思議でしたわねえ姐さん。」

「平打つて、何？一寸。」

光子が聞くと、

「ほら、お前様に話したぢやないか、我家の福ちゃん、緑河岸で知らない藝者衆に、簪を貰つて來た事。」

「あ、さう。その簪も萩の花で、咲松姐様の物だつたのだつて。」

「不思議な事もあるもんだわねえ。」

松吉は小首を傾けて、

「因縁でもんかも知れないわねえ………。」

「本當に、因縁に違なくつてよ。」

と小松が言ふ時、

「何だか、私、寒くなつて來た！」

と光子は身顛をする。

「ぢや、もう少し居たら、私だつてもその女の人を、見る事が出來たかも知れないんだねえ。」

「え、さうよ。」

「そりや、松吉姐様御覽なすつたら、屹度吃驚なさるほど、よく咲松姐様に似てよ。」

松吉は漸く乗氣になつて、

「何だか、私、見たいやうな氣がして來たよ。」

「今行つたら。姐様、まだ湯殿に居るでせうよ。」

「眞逆、もう一度お湯にも入れまいし………。けれども、何だか私、急に見たくなつて來たよ。どうしてだか、矢も楯も溜まらなくなつて來た。」  
つと立つて騒ぐのである。

「こんなにお客様は來て居ますけれども。」  
と小松で。

「一間々々探して見りや、後だつても知れるわよ。」

「だつて、他人の座敷を、覗くのも失禮ぢやないか、松ちゃん。それよりか、松吉姐様がそんなに御覽になりたければ、廊下をぶら／＼して居るつもりで、階下の湯殿の所まで、それとなく行つて入しつたら可わ。松吉姐さん、

松ちゃんと私とで、御案内しますよ。」

「何だか、御案内を受けちや、後室様のお花見のやうだね。」

と、一寸笑つたが、やがて少し沈んで、

「簪といひ、指環といひ、考へて見れば、随分不思議な事もあるもんだねえ。」

【参】

柏原の小間使の小夜は、つひ一寸打明けて仕舞へば可いものを、あゝいふ破目で打明けそびれて、終に奥様の御勘氣に觸れ、この惠比須屋へ着いても、殆ど同席をすら、許されぬほどである。

さればこそ、小夜最貴の奥様が、彼に對する御機嫌の悪いと見て取つて、得たり賢しと付入るお達の、あらゆる辯舌を振つて、小夜弾劾を申し立てる有様である。

指環の事件はなほ更に、母上がその御不機嫌の原因を、それとも知らぬ八重子三四子は怪しがつてあるほど、同じ夫人から申し出で、辯才天社參には、小夜に限りお供を許されぬ事となつた。

本人よりは姉妹の驚は數倍で、

「あら、母様、どうして小夜を山へ連れて行かないんです？」

「皆も行くのですから、小夜を連れて行つて遣りませうよう。」

「置いて行堀にしちや、本當に小夜は可愛想だわ、母様。」

「置いて行堀にするのなら、憎らしい達やをした方が可わ。」

「ねえ、母様。」

「小夜を連れて行つてよう。」

と右左から責めかける。

母夫人は默然として居たが、

「少しそこには、譯があつて、貴女達のお知りでない事で、私考へた事があるのだから、わざと山へは連れて行かない事にしたのです。」

小夜を呼んで、然く嚴に言ひ渡したのである。山へも、巖窟へも、強ひて行きたい氣はなくとも、不圖した事から奥様の不興を得て、それをのみ苦慮する折も折、そのやうな言葉のあつたので、何と答もなく、面を上げるやうも更になく小夜の憐れさ。

「どうしたの？ 母様、小夜は何か、危忽でもしたのですか、え？ 母様。」

「小夜が危忽でもしたのなら、お姉様と私とで、どんなにでもお詫をしますから、ねえ母様、堪忍してやつて下さい。」

「どうぞ、免して遣つて頂戴。」

「もし、山へ連れて行く事が、どうしても出来ないのなら、私達は小夜が一所に行かないちや詰まらないから、ねえお姉様、私達も行くの止してよ、

母様。

何と答へもせず居る母夫人は、

「三四！」

と眼で制し、八重子のなほ言はうとするのを遮つて。

「お前様達は、小夜の事に就て、一切口出しをしてはいけません。」

「あら！」

「でも……………」

とばかり、不平な顔を姉妹は見合はせる。

「いゝえ、黙つて入つしやい。黙つて——親をお連れ遊ばして入らしつた

お父様は、もう中津宮あたりでお待ちの頃だらうから、お支度が好ければ、早く行く事にならないぢやいけません。」

常は優しき母夫人も、時にはこのやうに厳しいのに、姉妹は寧ろ畏縮して、

返つたのである。

「ぢや、小夜、風呂へでも入つて、淋しいだらうが、待つて居ておくれ。」  
姉妹は小夜が泣き顔をして、玄關へまで送りに出たのを、却て氣の毒と見

返つたのである。  
勿論その場にあつて、冷やかな風情で居たお達の、小夜へは何の同情の言葉もなく、我は得知らずといふ顔で供に立つて行く。  
今となつては指環の仔細を、竟に打明けなかつた事の、いかにとも口惜しけれど、さて取返しもつかず、氣も滅入つて、涙ばかり出るのは、先頃の病の再發して來たのではないか。

奥様へ改めてのお詫をするのにも、身の濡衣を干すのにも、健康ならなければ仕方なきを、お嬢様方のお言葉の、風呂になど入つたならば、また鬱も晴れて、奥様の御機嫌のお直りになるやうな、お詫の言葉を思ひ付く事もがなと、つひその氣になつて下りた湯殿の内に、これは互に楽しく語り逢ふ

藝者が二人、全く見も知らぬ人ではありながら、どうやら昨夜逢つた咲松さんに縁のある、人ではないかとも思つてゐると、氣の故か、向ふでも此方を見て、懐しげな眼をするほど、餘程話を仕懸けて見やうかとも考へた位であつたが、程なく二人は上つて行けば、一人で居る風呂の中のうら淋しさ。もう好いほどにして上つて、一わたり涼んで、湯殿を出やうとする時、前の廊下に立つ人は？

懐しい先刻の二人の藝者が、その上の人とも見える藝者と一所に其所にある所で、何方から先ともなく會釋して、そのまゝに行違ふ。

三步四步行つて階子段の一二段、まだ今の人達は居るかと思返ると、向ふでも——三人とも此方に向いた、眼と眼とはたと逢つて、若い二人が更に莞爾する間に、更けた方の聲としては、

「指環もさうだし、全く咲松に瓜二つだねえ。」

内證で言つたのでもあらうが、小夜の耳には、『咲松』の名が殊によく響く。

人 影

【晝】

「貴方、起きて頂戴よ。貴方、貴方！」

下枝は夜半に不圖眼を覺まして、隣に眠る良人を揺り起すのである。

「貴方、まだ痛んで来たのですよ。貴方、貴方。」

劇しく揺起すのであるが、この頃の下枝が病の漸く募つて、晝のほどはかのヒステリイ症に規矩雄を一寸とても外へ出せばこそ。門を出れば、逢ふ人あつて、其所に待つものと思つて、我が傍を寸時も放さず。其上また愚痴に唧言に、様々の事を言つて、良人を惱まし、そのまた夜半になれば、例の胃痛の先頃よりは、なほ劇烈になつた有様に、夜の引明まで苦み悶え、傍にある規矩雄の介抱に落ある時には、罵るやうに責め立てるので、今日此頃の規

矩雄は、看病に疲れて綿の如く、古畳の如く、其所に倒れて起きもやらぬのに、此方は一層焦れ氣味になつて、

「貴方、——また痛んで来たのよ。苦くなつて来たのよ。起きて頂戴よ。痛いわ、痛いよ。」

頻に揺つても、良人は僅に口を動かして、聲はあつても言葉をなさないのである。

「貴方——痛い！痛くなつて来たわ。痛い！貴方、貴方、貴方！」

不斷の病苦に、狂ほしくなつたかと思ふやうに、蚊帳の内にあつて、立ち居つ、藻掻き苦みながら、なほ規矩雄を呼ぶ折、足でも踏んでか、それに加へて乳呑が、ぎやつ！と泣立てるのに、初めて夢を破つたる規矩雄の、溢き眼の前に苦悶する下枝がある。

「あ！また痛むのか！」

「痛いわ。貴方——痛いわ。」

兒の泣くのをも宥めねばならず、抱き寄せて、之をすかしながら、片手には下枝の方の介抱に手を盡さうとしても、疲れ切つて居る所として、男の力ながら下枝に投出されて意氣地なく、初子ぐるみ倒れて仕舞ふ。

また起上つて、下枝の脊を押付ければ、跳ねも返さん氣色なので、

「下枝さん、待つてくれ。少しの間我慢してくれ。薬を遣るから。」

妻はその言葉を耳にして、却て忌まはしげに、

「薬なんて、飲んだつて、利きやしない。痛い！苦い、痛い！」

「困る、さう藻掻いては！薬を飲んで、落着けなくつちや。」

「否ですつたら！薬は。」

「否だつたつて仕様がなない！」

泣く兒も仕方はないが、狂ふ人に稍遠き所に寝かして、蚊帳越にある下枝



が頓服の薬嚢を取りに懸れば、

「否！私に、毒薬なんぞ飲ましちや！」

規矩雄は愕然として、

「何を、お前言つてるんだい！」

寧ろ叱るやうに言へば、

「痛いわ、苦いわよ。毒を飲ます位なら、一思に刀でも何でも、咽喉を

抉つて下さいよ。」

「毒なんて……………」

と規矩雄は窮して、

「そんなものをお前に飲ます位なら、こんな心配はしないよ。」

「だつて痛い！どうかして頂戴。痛いわ！全く苦い！死ぬわ。死んで仕舞

ふわ！」

床の上をのた打ち廻れば、蚊帳の釣手はぶつりと切れて、組打をするやうな二人の上に、ばつさりと落ち懸かる。

「苦しい！苦しい！」

「蚊帳が落ちたから取る。そんなに動いちやいけない！」

「えい。もう！毒でも何でも、飲まして殺して下さい。苦い。私は死んで

仕舞ふわ。」

「困る！我慢して、少し静にしてくれなくつちや。」

「叱るんなら、早く殺して下さいよう。」

「誰も叱れやしない。殺さうとも言つた事はないのだのに。」

「お出なさい、その持つてる薬。毒は私が飲んで上げるから。」

引手繰らうとするのを、遣らじとする。また奪はうとして争ふはづみに、

規矩雄の手を滑つて、嚢は遙の床に當つて微塵に欠けると忽ち、みなぎり出

づ墨汁の如き液。

【貳】

痛い！苦しい！の悶の最も頂點に達するのは小一時間で、その内に烈しく來る時はあつても、また聊か間歇する所のないではなく、

「貴方、初は何所へか行きましたか？」  
と稍正氣に返つたもの、如く。

「あゝ、お前があむまり大きな聲をするので、吃驚して泣いたけれども、やつと寝た。」

「何所へか遣つたのですか。誰かに取られて仕舞つたのぢやありませんか。」

「何、取られるものか！私の方の床に寝かしてあるんだ。」

「あ、痛い！」

また少し癡學の起つて來たらしく叫ぶと、

「痛むのかい？」

それには答へず、身を藻掻いて、

「貴方、初は誰にも遣つて仕舞つちや否ですよ。」

規矩雄は慰めるやうに、

「だからさ、その事に就ては晝間も言つて聞かせた通りぢやないか。」

初はお前との間に出來た大切な兒だから、どんな逆境に落ちやうとも、またいかな悲運な目に逢はうとも、我が子への愛は變りつこはないのだから、そんな、他へ遣るなんて、そんな考へのありやう譯はないのだから、安心をおしなさい。」

「いゝえ——あ痛い。」

痛むのかい？」

「少し………。貴方、安心しろなんて仰つたつて、私ちやんと知つてるよ。」

「何を知つてるの？」  
規矩雄は稀有に聞く。

「えい、知つてるわ。あ痛い、また痛くなつて来た。貴方、押して頂戴！」  
再び下枝が苦悶する時も同じく、天井ではげた、ましく鼠が鳴いて、さも騒々しく暴れ廻る。

「痛いわ、苦しいわ、薬、頂戴——薬、」

規矩雄も無論この際頓服を飲ませたくも、今その罎は欠けて一滴もないので、詮術もない有様なので。

「困つたな。薬つて、飲まうと言ふ時にはありやしない。」

「痛い、苦しい、どうかして下さらないちや死んで仕舞ふ。」

「さう、お前のやうに、さう………」

天井で例の鼠は一層騒ぐ。先ほど漸く亂れた蚊帳は取除いたが、今度は襲ひ来る蚊に責められて。介抱もならばこそ。

「どうして？薬、貴方。」

「だから、飲ませたいのだけれども、罎を毀して仕舞つたから、もう一滴もないのだよ。」

「嘘——痛い！そんな事を言はずに飲まして。」

「嘘ぢやない。全くだよ。痛いだらうが、この夜半に他に何の方法も付かないのだから。」

「でも、どうかして下さいよ。痛い！苦しい！死ぬわ。殺して頂戴よう！」

「困るよ。殺してくれなんて言つてくれては！」  
はとく困じ果てたる規矩雄の面には、會釋もなく蚊は群り行く。

「堪らない！下枝さん、待つてくれ、蚊帳を釣り直すから……。」  
痛い！苦しい！の介抱をしなくてはならないのであるけれども、まづ蚊の方  
の防をと立上つて、先刻切れた釣手の紐を、間に合はせに結び合せたまでは  
可い、柱の糸に結び合はせて、首尾好からんとする時、規矩雄の寝衣の裾  
が障つて、隅に置く有明の燈がはつと消える。

「仕舞つた！」

「痛いわ。貴方何所へ行つたの？」

「今、洋燈を消した。寸燐を探して居るのだよ。」

搔探れども近い所に、手障するものもなし。

「痛い！薬を持つて来て……！」

苦み悶える聲の、さすがに疲れてか、漸く枯れて、細く、果は虫の息のや  
うにも聞えるほど、闇の内にある規矩雄は氣が氣でなく、

「下枝さん、どうかしたかえ？下枝さん、おい！」  
答は竟にないのである。

我にもあらず規矩雄は、暗中を這つて、下枝に近づかうとしたが、何とし  
てかその妻の身には觸れず。

怪し、いぶかしく起直つて、見るとしもなく見入る障子に、映し添ふは月  
の影か、朧々に人の影……。

【巻】

規矩雄が障子に人影を見止めたのも、實は今夜が初め手なのではない。  
その人の影は何者であるか。何者がこの椽へ密に来て、家の内を覗ふのか。  
怪しみ疑ふまでもなく、規矩雄獨りはそれと一領、また身を打顛はすのであ  
る。

事はこの夏も、行く春の名残を葉櫻に止むるある霧に、昨日まで降り暮ら

したる雨の上つたので、まだその頃は下枝も、それほど病苦もなかつたので、なほ逃げずに居た、婢を連れて、乳呑を抱いて、近い縁日へ散歩に行つた後、規矩雄が留守番の座敷に書見をする時、つひ雨戸を締め忘れた縁を霞めて、吹入る風にはたと燈の消えたので、丁度倦んだる折からでもあり、強ひて火を點ける要もないやうに思つたので、たゞ何ともしもなく椽側に立出ればまだ芽の出初めの庭の萩のあたりに、何やら白き塊のやうなものを見たので、初のほどは晝の内に、誰か捨てた紙の片でもあるかと思ふばかりであつたが不思議にもその白いものは、その内に、朧の光のあるもの、如く、また風にも靡いて、ふわ／＼と浮かぶよと見る間に、それは燈籠のやうな形をしたもので確にこれに蒼き燈の點るのを目にした。

その時怪しく胸の踊つた規矩雄はなほ懲りすまに庭の面を見入るほど、燈籠と見えたのは、瞬く内に人の顔のやうにもなつて来て。人の顔も、美しく

さてまた物凄さままで、輝く眼の色のどうやら、見覺のある女の面……。

お、咲松の顔！ と思はず叫び、身に氷を浴びたやうな思で、忽ち雨戸を繰出し、ひし／＼と戸締をして、それでも下枝や婢達の歸の遅いのを、待たれた程である。

その後、とある雨の夜半である。厠の窓から、何気なく庭を見下した時、いつぞやの燈籠のやうなる形の、浮かびつ沈みつ、ある道しるべをするかの氣色で、とある後を見れば、濡れしほたれた咲松が、しよんぼりとして居る立姿。

又来てか！ と叫んで、障子を立て切つて内に入つたが、かくして雨の夜が最も明瞭と、庭に芽ぐんだ萩の内に、亡き人の影を見たので。

「咲松は、私を恨んで居るのか知らん？」

そこに考の行つた翌日より、下枝の病勢は俄に募つた有様である。

「痛いわ、苦いわ。死ぬわ——どうかして頂戴よ、貴方。」  
 今まで静であつた下枝は、なほ苦みを續け初める。此方は、椽の人影に怖  
 ぢて居る所として、早く火を點したく、そのわたりを搔探つて、漸と此間を明  
 るくすれば、そのまゝ人の影も消え失せた。

「薬、貴方本當にないの？痛くつて仕様がないわ。」

「全く、薬は盡きて居る。困つたな。」

と規矩雄はその脊を擦るばかり。

「貴方、死ぬわ。お醫者を呼んぢやいけなくつて！痛いわ。堪らないわ。」

醫師を招くにもこの夜更に。よし招く事が成るにしても、他に人もなければ  
 自分ではなくては迎に立つべき者もなく。さりとて病婦を置いて、外へも出  
 兼ねるこの場の仕義に、

「そんな無理は言はないで居てくれ。夜が明けたら、またどうにでもする

から——え、下枝さん。」

「知らないわ。妻が病氣で苦んで居るのにも、冷然として居らつしやる。

醫者を呼んで下さいつていぶのに、それもして下さらなくつて——痛い！今

夜は私、悶え死に死んで仕舞ふわ……………」

悶え死にと叫びながら、漸くその苦痛も怠るよとあれば、痛い、苦しいと  
 藻掻く數も少くなつて、やがては漸くその痛の、去つて行くもの、如く、終  
 に疲れてその儘正體もなく眠り轉る。

「まあ、可い。」

と安堵の胸を撫下すと共に、今度は投げ放しにしてある、初子の上に氣が附  
 けば、

「よく寝てるのか知らん？」

と呟いて、我が寢床の、先刻寢かした所に乳呑の影もないのに、驚いて探れ

ば、こはいかに、初子は蚊帳の外に脱けて居て、何者にか引き寄せられた様に、椽の方へとその小さい手を伸ばして、而かも意識もなく動かして居る。

電 話

【意】

柏原の家族が江の島に遊んだ翌日、小夜は奥様の嚴命で鎌倉の地を離れ、主人皆様のお傍から別れるべく、餘義なくされたのである。

名目は東京に在る他の小間使との交代とあり。事實に於ても、年々その例にはなつて居るので、小夜が本邸へ歸ると其まゝ、磯といふ小間使が直ぐに光明館へと赴いたのである。

「どうしたの、お小夜さん、お前様、鎌倉から歸つて來てつてえもの、始終鬱いで居るぢやないか、加減でも悪いのかい。」

山出しの皮剥けた位の御飯炊ながら、思の外に温い情の年増で。この酷

暑にも感じないのか、常に女部屋にばかり引籠つて居る小夜を見舞へば、

「え、有誰う……………加減の悪い事はないんですけれど。」  
言ひながらも、頭痛がするか、額の所に手を遣つて居る。

「悪い事はないつて、顔の色が極悪いよ、海水にでも行つた人は、眞黒になつて、本當に丈夫々々して歸つて來なくつちやならないのに、お前様のはそれと全く反對で、出かけない前の方が、まだ病氣でもなかつたやうで居たのに、海水から歸つて來たら、丸で蒼ん僧だよ。しつかりおしよ、お小夜さん。」

「え……………」

となほ澁つて居る顔をつくく見て、

「一寸、お小夜さん。」

と呼んだ後、四邊を見廻して、さて小聲に、

「ねえ、お前さん、彼方で、また餘程お達さんに苛められたと見えるね。」  
はつとした小夜の、様子を強ひて隠さうとして、

「いゝえ。苛められなんてしなかつてよ。」

「お隠しでないよ。」  
と抑へて、

「いくら隠したつて知つて居るよ。さうでなくつても、他の人だつてあんなに意地悪のお達さんが。お前様になつてちや、なほ女の敵のやうに不斷からして居るのに、鎌倉へ一所に丁度行くやうになつて、大方また苛められてお前さんは泣いて歸つて来るだらうつて、此方に残つて居る者は、言ひ暮らして居たのが當つて、到頭ぼんやりしてお小夜さんは歸つて来たゞらうぢやないか。」

「ねえ、どうしたの？何を根に持つて、お達さんが苛めたの？話して御覽

よ。大方また詰まらない事を、掘りつ返してなんだらう。ね、さうだらう、お小夜さん。」

此方は訊ねられ、ば訊ねられるほど困じ果て、

「いゝえ。決してそんな、お達さんに苛められて来たのぢやありませんの、少しかう、気分が悪かつたの。それは大方彼地の水は良くないので、水中毒でもしたのかも知れないから、それで顔の色も、自然と勝れないのかも知れませんよ。」

「水中毒？さうかい……………」

どうも判ぬ風で、親切な御飯炊は太い首を傾げる。

「本當よ、大丈夫よ。そんなに心配して下さらないでも、大して病氣ぢやなくつてよ。」

「さうかい……………」



「え。構はずに居て頂戴。」

さうまで言ふのを、押して鬱ぎの根まで聞糺すでもないので、御飯炊はそれぎり、臺所へ出て行く後に、また更に、過越し方行く未を思ひ遣れば、つくづく世間がうるさく、忌はしさに太息さへも自から出る。

【貳】

何やら、否な夢を見たやうに覺えて、不圖目が覺めて見ると、夜はもう餘程更けて居るやうなのに、電話口の方に當つて、電鈴の音らしく聞こえる。

「今ごろ、まあ遅く、何所からか懸かつたのか知らん？」

小夜は呟いて、なほ空耳かとも思つて糺すと、再び幽に電鈴が響く。

「矢張、さうだよ。」

隣の床に寝て居る人達を、覺ましては氣の毒と、靜に蚊帳を潜り出て、隅にある古風の雪洞を携へ、音のあまり立たないやうに、隔の障子を明けければ、

夏も冷たき臺所の板の間を踏んで行く。

瓦斯竈のあたりを一巡、鼠入らずと米櫃との間からの、右は茶の間への通ひ口、左藏前の細いところを、つと脱ければ電話室になるのであるが、生木の何所やらにか、裂ける音の却て寂しいのに、面に當たる蚊の鳴聲も無氣味に、かの藏前にかゝる時、曲り角の柱にはたと打付けた雪洞の、蠟燭が落ちれば消えて眞の闇、つひ足元を、ざざと走る鼠もあるのに慄然とする。三度目の電鈴は近く鳴る。幽ではあるが、その響が何としもなく小夜の神經を亂すので。

勝手は知つて居る事として、探りくくに電話口の硝子戸を明けて、直ぐに手に障る受話器を取る。

「誰方でございますか？」

まづ我より問うて見るに、先には應ずるものもなし。

「誰方でございますか？もしく……………」  
 三度訊ねて見るに、一向に答のないので、それなら今の電鈴は、どうかしての空鳴であつたのかも知れないと、受話器を元に納めて室を出やうとすれば、また電鈴が鳴る。

「もしく。誰方でございますか？」

彼方に答のないのは、また重ねてある。小夜は例の四度訊ねたが、彌應するものがない。

「どうかしてるのよ、屹度。」

再び受話器を納めて、退かうとすれば又鳴る——而かも、今度の電鈴は最も明かであつたので、

「あ、もしく。」

彼方でも初て聲あつて、

「あ、もしく……………」

「あの、誰方でございますか……………」

さてまた答へざる以前に歸つたので、一層のくされと、此方より把手を廻して見る。

「貴方——もしく、柏原さんのお邸ですか？」

不圖、小夜の耳に判然と入つたのはこの言葉で、聲音はどうやら聞馴れたらしい女の聲。

「は。私、柏原の宅でございますが、貴方は誰方で居らつしやいますか。」

「私は……………」

後を言ひ續けたやうでもあるが、聞取れないので、小夜は更に糺したが、同じくまた、

「私は……………」

「は。誰方で居らつしやいますか………？」

それを訊ねては、いかにしても答へず、また舊に歸つて、あはや通じなくなりさうなのに、いつその事止めてとも思つたが、柏原かと向ふが訊ねた位であるから、そのまゝにするも本意ない氣がして、なほ電鈴の鳴るのを待つ。果して鳴る。受話器を耳にした。何やら、言ふが如く聞えて、前ほどの明瞭を欠いて居るので、小夜はさすがに去りもなり兼ね、聞かすにも居兼ねて困じて居る。

電燈が鳴る——幽に。小夜はまづ受話器を取らずに居る。

また鳴る——彌々幽に。なほ受話器を手にしらずに居る。

三度鳴る——最も幽に。とてもそれと心付かねば分らぬほどの音で。

小夜も實はあぐねて、急用ならば又重ねて、明朝でも改めて通じて來るであらう。もう此方よりは應せぬ事にして、終には狭き電話室から、つと身を

引かうとする時、眼の前の暗に、朦朧として白衣の女が立つ。

【参】

「あら、貴女は咲松さんぢやありませんか………。」

さう。ちや、今電話をお懸けなすつたのは貴方だつたのですか。さうでしたか。

鎌倉でお目に懸かつてから、つひあのお宿へ伺はうと思つて居ましたら、御存じでございませう。江の島へ、皆様のお供をして行つて、その途中から、奥様の御不興を受けました事。

實は、貴女に今度お目に懸かつたら、お恨を申し上げやうとさへ、思つて居りましたのでございますよ。

あれ、そんな事を仰つて！指環の事からでございますよ。

いゝえ、さうぢやございませんの。私は、あの指環は貴女からあゝいふ破

目で、頂いた事でございますので、まあ申さば、身に少しも暗い事はないのでございますから、まあ、あの意地の悪いお達さんに、あんなにも苛められました時、かうくでとつひ言つて仕舞へば、何の事もなかつたのに違ないので。

それにまた、奥様が、あのやうに事を分けて仰つて下さつた時こそ、もう自分では、心に元より疚しい所はないのですし、また現に申し上げた方が、却て奥様の御機嫌に叶ふ種と、直ぐに打明けてお話し申し上げやうと思へば、二度が二度とも貴女は傍へ入らして、耳に口を寄せて、言ふな！決して指環の事、私の事を言つてはいけないつて仰る、それでも私は、自分の身の爲正直に強ひて申し上げやうとすれば、もう私の口にお手をお遣りになつて、どうしてもお放しにならないのですもの……。

お恨みです。私は全く貴女をお恨み申しますわ。

それつきり、私は奥様の御不興を蒙つて仕舞ひましたのです。御不興を蒙りました揚句が、もうお前に用はないから、今日直ぐ東京へ歸つて、代を遣せつて仰つて、私はもう旦那様奥様を初め、お嬢様へのお目通りの叶はない、づゝと下の者になり下つて仕舞つたのでございます。

指環………？ はい、この基は、全くあの指環に違ございませんから、今度お目に懸かつたら、貴女にお恨を申し上げて、而して直ぐとあの指環を、お返し申さうと思つて居りましたのです。

え、もう、茲に嵌めては居りませんとも。嵌めて居ればこそ、お達さんに無い腹を探られたので、また奥様からも、かういふ事になつたのでございますから、私はそのまんま自分の手文庫へ、ちゃんと仕舞ひ込みましたのです。

一寸お待ちなすつて、今直ぐと茲へ持つて来て、貴女へお歸し申しますか

ら。

あれ！困ります、さう袂を持つて、お止めになつたのぢやいけませんよ。私是非貴女へ、あの指環をお返し申さなくつちや、この氣がちつとも濟まないのでございます。

氣が濟まないのならこそ、歸つてからといふものは、この事が苦になつてどうにもして奥様達がお歸り遊ばした時、證を立て、御勘氣のゆるるやうに、務めたい考へなのでございますから。

あれ！いけません。どうぞ其所を放して！放して下さい。是非取つて來て貴女へ直ぐとお返し申しますから。

困りますよ。本當に——何故さう……着物が切れますからさ。そんなに何だと、大きな聲で人を呼びますよ。

あれ！誰か——あ！口を抑へて、あ！あ！あ……！

あ！あ！苦い。息が、つまつてよ。

あ！あ！あ！

なら、持つて來ません、屹度持つて來ません、大丈夫。ですから、口も、袂も放して。どうぞ……。

あ、どうも切なかつた事！

【四】

え。え。え。それやさう。それやさういふお約束もしましたわ。

は。は。は。……さうなの。それやまた私からお願ひ申した事なの。

で、貴女が此頃の規矩雄様の入らつしやる所を、御存じだと仰るから——是非御案内して下さいました。

え、さう。それも貴女から仰つた事なのですわ。

私の方は、何ば他の奥様をお持ちになつた、恨めしい規矩雄さんでも、お

顔を見れば、その頃の睦まじかつた事も想ひ出して、憎い、薄情な方！と怨んだ事も、不意と忘れて仕舞つて——それや、うつかりお話を仕懸けないかも知れません。

あら！それを貴女はいけないと仰つた。どんな事があらうとも、逢はせて遣る代には、決して規矩雄さんと口を利き、言葉を替はしちやいけないつて。

私は、それやあんまりと思ひはしましたけれども、さう申せば貴女だつて、話をするんなら逢はせないと仰るから、なら、宜しうございます。御案内を願つて、私をお連れ下さるんなら、規矩雄様の前へ出ても、決して口を利きません。屹度——會釋も致しません。

私は、貴女に堅いお約束を致しました。

貴女は、それからその約束を守るとか、守るまいとかいふ事になつて、あの指環を出して私に下すつたの。

それを何の氣もなく、受け取つたのが、かういふ事になつて、否な思をするやうになつた源にならうとは！

だつて、本當にさうに違ないんですもの。指環がなければ、あんな破目にはならなかつたんです。

あれ！私、少し貴女の仰る事を——滿更當にしないんぢやないけれども、何だか、實の所、貴女が恨めしくはなかつたのよ。

あ、さうです。え、さうです。本當に逢はせて下さるの？

え、そりや始のお約束通り、口を利かなくつても宜しいのです。言葉も交はしたくなるでせうが我慢します。撥挨拶だつて、屹度しは致しません。

で、いつ——それなら、逢はせて頂けるのでございますか。

あら！まあ、さうなのでございますか。まあ——それでわざく。  
おや！さうでございましたか。い、え、決してもう。

御免なさいまし。それは御免なさいまし。全く知らなかつた事なんですから。あら！また焦らして。だから御免なさいと申して居るのでございますよ。で——いつ？今……？……？只今から？是からあの、規矩雄様のところへ？それでお誘ひに入らしつて下すつたのでございますつて——まあ、どうしたら可いでございますうねえ！

え。それはお詫致します。いゝえ——御免なさいまし。

は。是非——お逢はせ下さいまし。お供致します。

で、あの指環は？もう貴女の方でお約束を守つて、かうやつて入らしつて下すつたのでございますから、もう、あれをお預り申して居ります事は………あれ！それはいけません。いけません——あの指環ばかりは、お返し申さないぢや、私の心が濟みませんでございませうから。一寸お待ち下さいまし。今、直ぐ行つて取つて参ります。

あら、あら！また、袂をお抑へになつて。いけません！いけません！今度こそはいけません！あら！持つて来れば規矩雄さんに逢はせないつて？まあ！

宜しうございます。詮方がございません。ではこゝをお放し下さいまし。

え、持つて参りは致しません。

で、その前に一寸、窺つて置きたい事がございますが。あの………御親切に私を、規矩雄様にお逢はせ下さいまして——その後になつたら、あの指環は貴女から頂いた事を、奥様だけへは打明けてお話しして、宜しうございませうか。

え、何でございませうつて？

あら！それはその時の場合で、返事をして下さいますの、打明けても可いから可、まだいけないならいけないつて、まあ！困りますわねえ………。

あゝ、あ、では御免下さいまし。それで宜しうございます。お言葉の通りに致します。けれども——あれ！それもあむまり………奥様はじめ、御主人様への恩を仇にする事は出来ません。

え。それはさうね。では、その事に就ては後の御相談として。

これからお連れ下さいますの？まあ、嬉しい。

えい、え、この形装で差支は少しもございませんわ。そんな事——否あね。

嘘よ。貴女だつてその癖に！

では、御厄介ですけれどもお連れなすつて下さいまし………。」

暴 飲

【言】

「まあ、君もう些飲みたまへよ。さうまた、妻君の事ばかり思つて居たつ

て、詰まつたもんぢやありやしない。そんな事をして居るから、自然妻君が  
増長するんだよ。ヒステリー病、申し換へれば増長病だ、我儘病だ。飲みた  
まへ、構はないから飲みたまへ。

あんまり君が、妻君の病床にばかりへばりついてばかり居るから、意氣全  
く鎖沈するんだよ。

今日首尾よく會社から連れ出して、かうやつて極々昔馴染の、松吉姐様、  
小松ちやんなど、會見させて上げたんだから、此際性根を入れ替へて、大に  
當年の八杉規矩雄君、河瀬石町の若旦那になつてくれたまひな。えい？」

もう六分目は酔つて、規矩雄を惱まして居るのである。  
傍に侍して居るのは、實に昔馴染の松吉や、小松で。

「本當に、若旦那、時には御酒もお薬になるんですわ。些位は鬱さ晴らしに、  
お上りになつたつて、奥様は何とも仰らう筈はありますまい。」



「さあ、私がお酌を致しませう。」  
と鏡子を取る小松の、

「若旦那、どうぞ咲松様がお酌をするんだと思つて頂戴。」

莞と笑つて、規矩雄の顔を見守つたのではあるけれども、『咲松』と言はれて八杉は慄然として、傍を向くなり彌々固くなつて仕舞ふ。

「あら、否だ！若旦那や、本當に、しばらくお目に懸らない内、貴方偏屈になつたのねえ。」

と松吉はつくづくさう思つて、規矩雄の心を知らないから、小松と二人、それには彌次馬に祐次が入つて、咲松を追憶の話に花が咲く。

「で、我家に居るお酌なんぞは、梅雨の頃縁河岸で、咲松に逢つて、遺物に簪を貰つて來た事もある位なの。」  
と松吉が言へば、

「よくよく咲松様は、執心を残してお居でなんだと見えるわね。」  
と小松が附加へて、

「それからまた、不思議なのはあの江の島での事。はら、ねえ姐様、湯殿に居た女の人を、姐様や私は咲松さんに生寫だつて言つて騒いだけれども、私達を連れて行つてくれたお客様に見せたのぢや大違だつて、眼も眉毛附も全然鑄型違だつて仰つて居てよ。それからまだ可笑しいのは、私達はその女の人の右の無名指に、ちやんと萩の花に眞珠の入つた、咲松さんの遺物の指環を嵌めて居るのが分るのだけれども、そのお客様が見たのぢや、そんな指環なんて、一つも嵌めて居やしないつてえの——随分、妙な事もあるもんだわねえ。」

「若旦那や、貴方は随分罪を、お作りなすつたのねえ。」  
しみぐくと松吉に言はれて、規矩雄はなほ默然として居るのである。

「やあ、やあ、咲松ちゃんの話で、気が滅入って仕舞つた！さあ〜潔く飲み直しとしやうぢやないか。これさ、規矩ちゃん、君も昔のやうに大に飲み、且つ浮かれるやうになりたまひつて言へばねえ。」

「今夜は昔馴染の私達が居るんですから、どうぞ機嫌よく召上つて頂戴なねえ。」

松吉は小松から銚子を受取つて、強ひて規矩雄に差したのである。

【貳】

「御免蒙つて、矢張私は歸らうか。」

突如として規矩雄が言ふ。

「あれ！どうして？可ぢやありませんか。」

と松吉が希有な顔をする時、

「いゝえ、どうもいけない。我家に病人を扣へて居ると、どうもお酒を飲

んでも、酔ふ氣にならないから。」

「妻君孝行め！」

ともう、泥のやうになつて居る祐次が。

「止せ〜。人間が一生女房の爲めに縛られて仕舞つたら上つたりだ。何の事業も出来るもんか。」

罵倒をするのを、さすがに聞き兼ねて松吉が。

「あら、それもあんまりですわ。お神様の良いのを持って、それに助けられないぢや、男はまた出世が遅いつていふわよ。」

「いや、いや。」

と祐次は冠を振つて、

「駄目、々々。さういふのはそりや當り前の男と普通の女とが、一所になつた場合で、この規矩ちゃんのやうな、酒も飲まない、野暮一方の男にあん

な病身な、焼餅焼の妻君を配偶にして、それで出世が出来たらおたまり小法師だ。

それでまた、別に因縁もないのなら知らん事よ、ねえ。あゝいふ破目であんなに惚れ込んで居る、咲松に肱鐵炮を喰はした末が恨み死の、その思が取つ附かないぢや、一層理屈に合はないつてもものだ。」

酒が業して、それほどの事を言ふ。規矩雄はたゞでも身を顛はして居るのに、今日不圖して訪ねて来た祐次に捕へられての、果がこの始末なので、實は内心大に快からずに居たのである。

「や、どうしても私は歸らないぢや。」

と立ち上る規矩雄を、

「まあ、可つて事さ。下に居たまへなね。」

と無理に座らせて。

「ねえ。十時までに歸して上げれば文句は入るまい。松吉さん、今何時だ？」

松吉は帯の間に挟む青柳織の紙入の中から、鎖なしの薄手の時計を出して見て、

「まだ九時一寸過ぎよ。」

「ほら見たまへ、もう三十分は飲める。」

「飲めるんなら、祐さんだけ遣つたら好いでせう。私は、殊に今宵は咽喉に酒も通らないから。」

「おやく、それはまた以ての他の御挨拶だね。可し。可し。」

「君にその心持があるんなら、可し。僕にはまた僕だけの戦闘準備はあるので、松吉を抱き込んで、飲み潰して仕舞はなければ、氣が濟まない。」

と執圀いさまく有様ありさまを、あんまりと見て中なかに入はいつた松吉まつきちは、小松こまつと共に取爲とりなして、  
「まあ、貴方あなたの仰おつしやりやうも、露骨むきだし過ぎるわよ。些ちつとはまた、若旦那わかだんなのお心持こころもちを買かつて上げないぢやならない所ところもあるから……かうなさいよ。まづ稻津いなづさんの仰おつしやる通り、若旦那わかだんなも大人おとなしく十時じゅうじまで入いらつしやい。而さうしてお心持こころもちよく御酒ごしゅを上あつて、お歸かへんなさい。ね、さうすれば奥様おくさまにも可よし、稻津いなづさんにも上首尾じやうしゆびなんぢやありませんか。」

「若旦那わかだんなや、私達あたしたちも精々せいせいお座敷ざしきを取持とりもつわ。どうぞ咲松さきまつ姐様ねえさん同様に、お引立ひきだてを願ねがひます。——可よかつたねえ。」  
と後あとを笑わらにする小松こまつ。

どうでもこれは遁のがれがたきと知しつて、何なにと思おもつたか、規矩雄きくをはその我が前まへの椀わんの蓋ふたを取とつて、つと差出さしたして、

「ぢや、い、これへ波々なみくづ次ついでくれ。昔むかしの八杉やっしき規矩雄きくをに歸かへつて、盛さかんに飲の

んで見みせるから。」

「あれ！」

と松吉まつきちの驚おどろきより、

「や、これは規矩きくぢやんも、忽たちまち娑婆しゃはつ氣きが出でて來きたとは面白おもしろい。飲のめ、盛さかんに飲のめ！盛さかんに飲のんで可愛かあいい病人びやうにんの事ことなんか、忘わすれて仕舞しまへ！」

「お、苦くるしみも何なにも、酔よつて忘わすれて仕舞しまふから可い。」

松吉まつきちが氣遣きづかひく、次ついだ一椀いちわんの酒さけを一息いいきに飲のみ干ほす規矩雄きくを。

「や、これはお見事みごと！」

一座いざは寧あきろ呆あきれて居かる。

夢現

【三】